

AICHI-NAGOYA



時を旅する 愛知の街道

東海道
美濃路
飯田街道



愛知県街道観光
推進協議会

時を旅する 愛知の街道



発行 愛知県観光コンベンション局観光振興課
愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1番2号
TEL.052-954-6355 (ダイヤルイン)





愛知の街道

目次

- 03 街道旅に出かける前に
- 05 なるほど街道用語集
- 07 **愛知の東海道**
- 09 二川宿
- 10 吉田宿
- 11 御油宿～赤坂宿
- 12 読み物 「四つの東海道」
- 13 本宿
- 14 藤川宿
- 15 岡崎宿
- 16 池鯉鮒宿
- 17 読み物 「鎌倉街道の面影」
- 19 有松
- 20 鳴海宿
- 21 熱田宿
- 22 読み物 「城下町名古屋をめぐる街道」
- 25 **愛知の美濃路**
- 26 名古屋宿
- 27 清須宿～稲葉宿
- 29 稲葉宿～萩原宿～起宿
- 31 **愛知の飯田街道**
- 32 東桜～杖中
- 33 八事～平針、足助
- 35 読み物 「足助の塩」
- 36 稲武
- 37 伊勢神峠、夏焼
- 38 読み物 「尾張・三河の塩の道」
- 39 愛知の街道資料館を訪ねる
- 41 愛知県全域地図

街道旅への誘い

時を旅する。 歴史を歩く。

遠くへ出かけるだけが旅ではない。

この小冊子をご提案するのは、時を越える旅。

数百年という時間を自分の足で踏みしめる行為もまた

身軽でぜいたくな新しい旅のかたち。

たとえばそこが見なれたいつもの道であっても

ちよつとした想像力をプラスすれば

昔の旅人たちが歩いた面影をたどることもできる。

まずは歩きやすい靴を用意して

身近にある旧街道へ出かけよう。

弥次さん喜多さんならずとも

そこには多くの発見が待っているはずだから。

街道旅がもつと楽しくなる、なるほど街道用語集。

街道旅に出かけた際、ふと出会う江戸の旅用語の数々。出かける前に知っておくとちよつと便利（*概ね、愛知に関わる用語を中心に五十音順に記載）。

■間の宿（あいのしゆく）

宿場間の距離が長い場合や峠道などの難路である場合、正規の宿場と宿場の間に設けられた休憩用の宿（自然発生的に成立した場合もある）。本陣や旅籠はなく宿泊はできなかった。有松（名古屋市）、本宿（岡崎市）は間の宿。



有松の町（名古屋市）

■一里塚（いちりづか）

街道の両側に一里（約4km）ごとに塚を設け、その塚の上に目印として樹木を植えたもの。一里山ともいう。織田信長、豊臣秀吉のころから築かれたが、制度として確立されたのは、慶長9年（1604）、徳川家康が二代將軍秀忠に命じて、江戸日本橋を起点として主要街道に築かせてから。



富田一里塚（宮市）

■追分（おいわけ）

街道が左右に分岐するところで、各地で地名として残っている。茶屋が置かれていた場合が多く、休憩所として利用された。



東海道・吉良道追分（岡崎市）

■御茶壺道中（おちやつぽどうちゅう）

毎年旧暦の4月から6月にかけて江戸と京の宇治を往復し、幕府御用の茶を運んだ二行のこと。基本は東海道を利用したが茶を詰めた復路は、湿気を嫌い東海道の海路を避けて、美濃路や本坂道を通った。幕府御用の御茶壺道中は他のすべてに優先されたため、宿場の人々や街道沿いの人々は負担を強いられたという。「茶壺に追われてトピンシャン、抜けたらドン・ソシヨ」の童歌で有名。

■街道・海道（かいどう）

交通往來の多い主要な道。海道や道中、往還などと表された。このうち海道は、もともとは海沿いの道を意味する。鎌倉時代の東海道は、「京・鎌倉往還」とも、「海道」とも呼ばれていた。その後時代は不明ながら、主要幹線道を海沿いになくても「海道」と呼ぶこともあった。

■曲尺手、曲尺之手（かねて、かねて）

宿場の出入り口、または宿場内の道筋を、鍵型に曲げた道筋のこと。樹形ともいう。当初は、敵の進行を妨げる意味合いがあったが、後には宿場内で大名行列が鉢合せないように視界を遮る役目となった。互いの行列を見えないうちに曲尺手の先で確認し、もし鉢合わせる場合、格下大名家は近くの寺などで待ち、通過時期を外した。



鳴海宿の曲尺之手（名古屋市）

■鎌倉街道（かまくらかいどう）

鎌倉時代、東海道も含めて、諸国から鎌倉に至る道のこと（P.17、18参照）。

■高札場、札ノ辻（こうさつば、ふだのつじ）

高札とは幕府や諸藩が決めた法度や掟書、禁令、罪人の人相などを木の板札に掲示した立て札のこと。この高札を、人目を引くように交通量の多い宿場の辻や市場に高く掲げておく場所。札ノ辻ともいう。



二川宿の高札場（豊橋市）

■五街道（ごかいどう）

江戸・日本橋を起点に放射線上に設定された江戸幕府の五つの主要幹線道。東海道、中山道、奥州道中（街道）、日光道中（街道）、甲州道中（街道）。

■参勤交代（さんきんこうたい）

江戸時代、諸国の大名は幕府から江戸に屋敷を与えられ、妻子はそこに暮らし、江戸を離れることはできなかった。一方、大名たちは江戸と国元（領地）を原則一年交代で往復していた。江戸に赴き將軍に拝謁することを参勤、国元に帰ることを交代といひ、合わせて参勤交代とよばれた。三代將軍徳川家光の時に制度化された。本来は平時における軍役奉仕のため、出陣し將軍家を守ることに目的であったが、泰平の世にあつては大名たちの権威と格式を示す機会になった。またこの制度により街道や宿場など交通インフラの整備や各地へ文化の伝播をもたらすことになった。

■三州（さんしゅう）

三河国のこと。

■三州馬塚ぎ（さんしゅううまかせぎ）

信州の馬塚ぎ川・中馬一に對抗して荷を運び街道を往來した三河の馬塚ぎのこと。江戸時代後期、信州と三河の馬塚ぎの間で争いが起き、文政3年（1820）幕府が仲裁に入り、三河側の馬の頭数や馬塚ぎに参加できる村を制限した。

■塩の道（しおのみち）

沿岸部でとれた塩を内陸部に運んだ道のこと。中部地方では信州の塩尻を終点とし、尾張・三河から信州に至った飯田街道、伊那街道などのこと。なお、尾張・三河から運ばれた塩を「南塩」と呼び、日本海から千国街道を南下して運ばれた塩を「北塩」と呼んだ（P.38参照）。

■尾州（びしゅう）

尾張国のこと。

■七里の渡し（しちりのわたし）

東海道熱田宿（宮宿）から次の桑名宿までは海路七里の船旅であった。所要時間は約4時間といわれたが、潮の干潮や天候によりコースも異なり、時間も距離も定ではなく時には休船を余儀なくされることもあつた。また利用者側も船酔いや、排尿の心配もあつた。そのため、迂回路として美濃路や佐屋路（佐屋宿から桑名宿まで木曾川を下る三里の渡し）が利用された。



宮の渡し公園（名古屋市）

■姫街道（ひめかいどう）

一般には本坂道（御油から本坂峠を越えて浜松などで東海道に合流）の別称。敵軍新居の関（静岡県）を避けたため、あるいは浜名湖を横断する今切の渡し、海路の危険を避けるため、縁起をかついで「今切」という言葉を避けた。女子の往來が多かった東海道のバイパス。七里の渡しを避けた佐屋路や駿河街道のうち平針から岡崎までの道にもこの別称がある。



姫街道（本坂道）道標（豊橋市）

■棒鼻（ぼうはな）

宿場のはずれ境界（出入口）に立つ棒の杭のこと。見附ともいう。歌川広重「東海道五十三次（保永堂版）」の藤川宿の画にも棒鼻が描かれ、岡崎市の旧藤川宿に復元されている。



歌川広重「東海道五拾三次内 藤川 棒鼻ノ図」/資料提供:静岡市東海道広重美術館

■常夜灯・燈（じょうやとう）

宿場内や寺社境内を照らすため、あるいは遠方からの目印として夜間に火を灯した灯籠。街道には宿内安全、町内安全などと彫られた一般的なものと、火伏の神を祀った秋葉山へ参詣するために街道沿いや、人々が火伏の神への信仰や地域の安全を願って建てた秋葉山常夜燈がある。

■宿・宿場（しゆく・しゆくば）

街道の要衝にある集落。旅人の宿泊・休憩のための宿屋・茶屋や、荷物を運ぶための人足や馬を集めた町場。宿駅ともいう。宿場の最も重要な役割は、隣の宿場から運ばれてきた幕府公用の荷物や通信物を、次の宿場まで運ぶに送り業務であった。そのため宿場は、本陣、脇本陣、旅籠などの宿泊施設だけでなく、継ぎ送りを行う問屋場が中心となった。宿場は、交通量が増大するにつれ、しだいに町としての様相、機能を整えていった。

■信州（しんしゅう）

信濃国のこと。

■助郷（すけごう）

幕府は各宿場に一定数の人馬を常備する義務付けをした。しかし、街道の交通量が増大すると、宿場に準備されている人馬だけでは足りず、近隣の村々から人馬を提供させることになった。その制度のこと。

■立場（たてば）

宿場の出入り口や宿場と宿場の間にあつた旅人や人足、駕籠かきなどが休息した場所。もともと杖を立てて休息したのでその名が起った。中には「立場茶屋」という土地の名物を出す茶屋も存在した。



二川宿本陣（豊橋市）

■本陣（ほんじん）

公家や大名、幕府の役人が旅の途中、宿泊・休息する施設。街道に面して広い間口を持ち、表門・玄関・書院が設けられた。一般の旅人の宿泊は認められない一方で貴人の宿としての格式を保つため、維持管理に多くの費用がかかり本陣の経営は厳しかった。豊橋市の二川宿本陣は、旧東海道の宿場では2か所しか現存しない建物。

■樹形（ますがた）

曲尺手、曲尺之手と同じ。

■見附（みつけ）

棒鼻と同じ。

■尹良親王（ゆきよしんのう）

室町時代初期、南北朝の争乱期の南朝方の皇族。後醍醐天皇の孫。劣勢挽回のため、天皇によって遠江（静岡県西部）に使わされた宗良親王が父とされ、尹良親王も各地を転戦したといわれる。飯田街道沿いの足助、稲武地域や別所街道の豊根、さらに南信州にかけてゆかりの遺跡や伝説が点在する。



尹良親王の腰掛石（豊田市武節町）

■脇往還、脇街道（わきおうかん、わきかいどう）

幕府の道中奉行が管理した五街道とその付属街道を除く、地方の街道のこと。街道が通る地域の諸藩が管理・運営し、幕府では勘定奉行が間接的に関与した。

■脇本陣（わきほんじん）

本陣の補助的な宿舎で副本陣にあたる。本陣の宿泊客が多い時に利用された。本陣が平屋建てを原則とするのに対し、脇本陣は二階建ての場合が多かった。

■中馬（ちゅうま）

江戸時代、信州の伊那（糸）谷の農民たちが農閑期に馬や牛の背に載せ運搬した荷物運送業者（馬方）たち。さらにその馬や牛のこと。当初は自家の農産物を町の市などに運び商いをし、帰路に海産物を持ち帰ったが次第に商人の荷を扱っていった。後に信州全般に広がる中部山岳地帯と太平洋沿岸地域を結ぶ重要な物資輸送の担い手となった。「貢馬（ちんば）」、中継馬（ちゅうけいば）」が語源といわれる。敵密には信州の人々を指す。

■付け通し（つけとおし）

幕府や諸藩の官道における物資輸送は、荷物や馬が宿場間をリレー式に継ぎ送られる制度だったが、官道を避けた中馬による輸送は、直接目的地に輸送する形態がとられた。付け通し、あるいは通しと呼ばれた。

■伝馬（てんま）

幕府の公用を行うために宿場で馬を乗り継ぐ、その馬のこと。伝馬制自体は、古代から行われていた。慶長6年（1600）、徳川家康は今川、武田、北条らの戦国大名や豊臣秀吉の伝馬制を発展させ、江戸と京を結ぶ東海道の宿場に伝馬定と伝馬朱印状を発した（宿場ごとに馬36疋を置くこと、隣の宿場までの馬継ぎに責任を負うこと。東海道の各宿場には馬は36疋を備えさせたが、寛永15年（1638）以降は100疋の伝馬を置くことが義務付けられた）。

■問屋場（といやば）

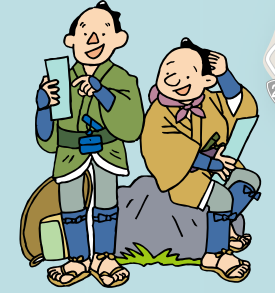
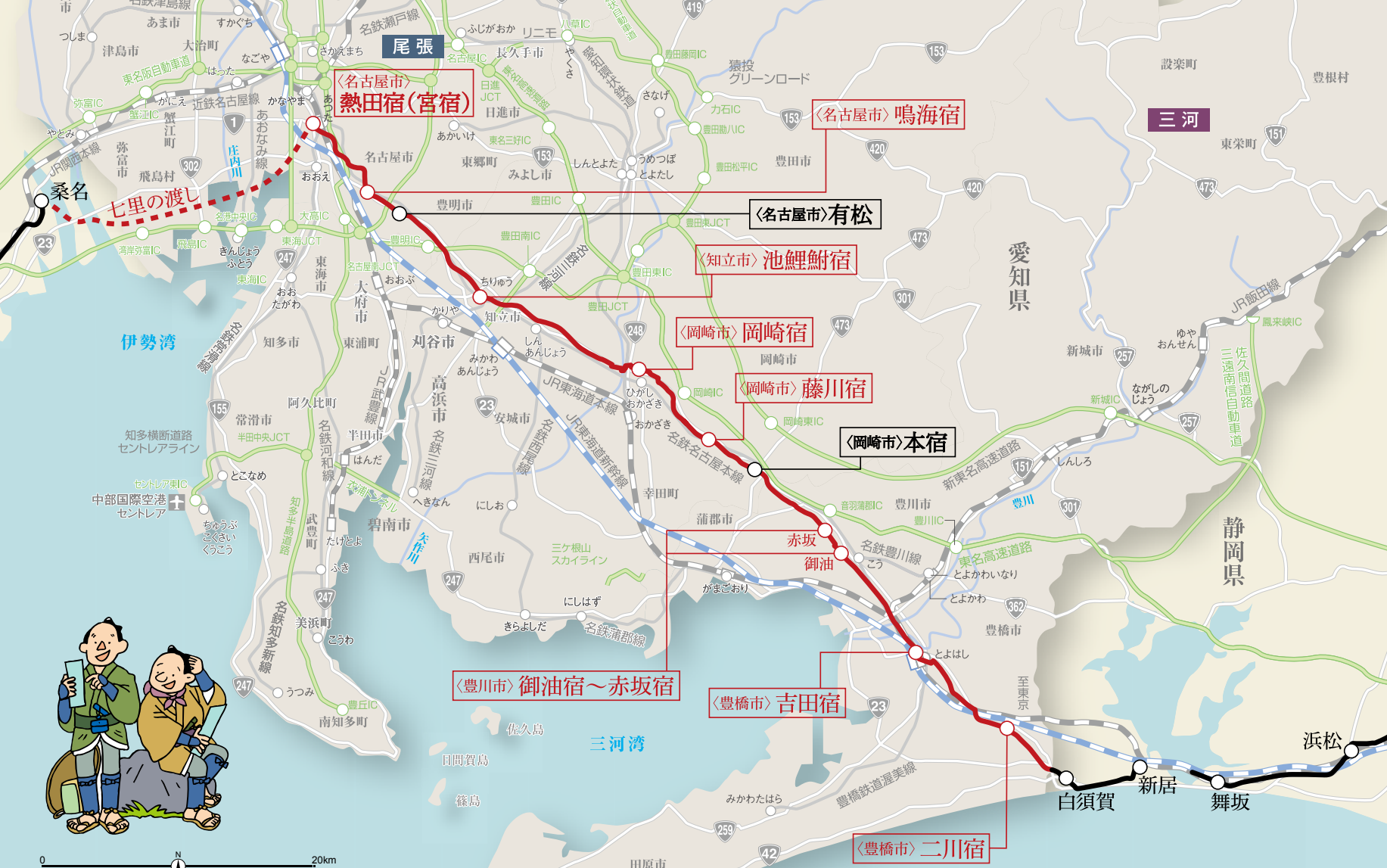
参勤交代の大名家や、幕府の公用の旅人たちが宿場を利用する際、馬の手配や次の宿場まで荷物の継ぎ送りをする人馬の継立（つぎたて）業務と、同じく幕府公用の書状や品物を次の宿場に送る継飛脚（つぎひきゃく）の業務を行った宿場の中核的施設。

■道中奉行（どうちゅうぶぎょう）

江戸時代、五街道とその付属街道（五街道に付属する重要街道、愛知県では美濃路、佐屋路、本坂道）における宿場の伝馬、宿屋、飛脚の取締りや道路、橋梁など、道中一切のことを

《愛知の東海道》

東海道は、江戸と京・大坂を結ぶ交通の要路として、参勤交代の大名や多くの旅人たちが往来を重ねた道。東西と結ばれた愛知の東海道とその宿場町は、にぎやかだった頃の歴史文化を今に伝えながら時を刻む。松並木や一里塚、本陣や旅籠など往時の面影を訪ねれば、眼前の風景の向こうに江戸の旅模様が浮かび上がる。さあ、東海道へ。



歌川広重「東海道五拾三次内」(保永堂版) / 資料提供: 静岡市東海道広重美術館

二川宿

現存する本陣が、江戸の旅を伝える

二川宿は、江戸日本橋から数えて33番目の宿場町。当初は二川村と大岩村の二村で一宿分の役をはたしていたが、交通量の増大による不都合から移転し一続きの町となった。現在でも江戸時代の町割りが見え残る中、東海道で2か所しか現存しない本陣（大名や公家など貴人の宿舎）、庶民の宿であった旅籠、さらに宿村役人の店舗兼住居（商家）が公開されている。また住民・行政・大学の協働により一般の住居や店舗も歴史的な町並みに調和するよう工夫がなされ、切妻平入の軒が並ぶ宿場町らしい景観が見られる。



① 芭蕉の「阿ちさむや 藪を小庭の 別座敷」が刻まれた紫陽花塚がある。② 聖観音像は、街道の風物詩として道中記などにも取り上げられた。

調和のとれた町並みに宿場町風情を味わう

豊橋市

JR二川駅から豊鉄バスに乗り二川東町バス停まで下車。南に100m歩くと東海道。東海道を西へ進み旧二川宿に向かう。芭蕉句碑のある妙泉寺、商家「駒屋」、本陣と旅籠屋「清明屋」、さらに本陣資料館で江戸の旅模様を学ぶ。町並み散策の後には旅人たちが眺めた観音像の立つ岩屋山へ足をのびてみよう。



② 二川宿で商家を営むかたわら、問屋役や名主を務めた田村家の遺構。主屋、離れ座敷、土蔵などが一般公開。③ 二川宿本陣と旅籠屋「清明屋」が見学できる。東海道、宿場、本陣について学べる。④ 境内には寛延4年（1751）の灯籠や秋葉山常夜燈がある。⑤ 田原街道との分岐として明治33年（1900）に建てられた。



information (P9-10共通)

問 豊橋観光コンベンション協会
☎ 0532-54-1484
所 豊橋市花田町字石塚42-1

【豊橋観光ボランティアガイドの会】
☎ 0532-54-1484
※要予約・無料
実費(交通費・食事代・入場料等)負担

所要時間 約1時間5分
距離 約3.5km

吉田宿

城下町、湊町としてもにぎわった宿場町

吉田宿は、江戸日本橋から数えて34番目の宿場町で現在の豊橋市中部と重なる。吉田の町は古くは今橋と呼ばれ、東三河の拠点として戦国時代の争乱の最中に吉田に改称された。江戸時代は、吉田藩の城下町、東海道の宿場町、さらに豊川の舟運や伊勢詣での船旅の湊町としてもにぎわった。東海道は吉田城の惣構えの堀に沿って道筋が通され町屋が立ち並んだ。明治2年（1869）、吉田は豊橋に改称。戦災や戦後復興のため宿場町や城下町の景観は失われたが町名や拡張された道筋に街道の名残が残されている。



①元は、文化2年（1805）に建てられた秋葉山常夜燈。平成13年（2001）復元。②吉田城の東惣門跡を伝えるミニチュアが再現されている。③史跡に指定されている曲尺手門の跡。



豊橋市

豊橋駅前から路面電車に乗り東八町電停まで下車。歩道橋を西へ渡る。東海道は吉田城の東惣門跡レプリカを右手に南へ進み、すぐに右へ折れ、さらに左へ折れて国道1号線と平行に西へ進む。鍛冶町、呉服町等の町名を頼りに吉田宿をのび、途中、豊橋公園となっている吉田城本丸へ寄り道。再び東海道に戻り本陣跡、脇本陣跡、旧豊橋跡に向かう。



④ 城全体の敷地は、名古屋城より広く全国有数の巨城だった。⑤（右）吉田宿には本陣が2軒あった。（左）駐車場の片隅にひっそりと佇む脇本陣跡。

地域とふれあう! 四季カレンダー

春 さくらまつり (3月下旬~4月上旬)
豊橋公園で開催。

夏 祇園祭 (7月第3金・土・日曜)
手筒花火約300本を奉納する豊橋の夏の風物詩。

秋 炎の祭典 (9月)
三河伝説の手筒花火250本が放たれ、毎年多くの見物人が訪れる。

冬 鬼祭 (2月10・11日)
国指定重要無形民俗文化財の奇祭。

味わいたい! 地元の名産品

菜めし田楽
豆腐田楽と菜めしは江戸から続く名物。



所要時間 約1時間26分
距離 約4.7km

豊橋鉄道市内線 東八町駅

1 秋葉山常夜燈 徒歩1分
2 東惣門跡 徒歩12分
3 曲尺手門石碑 徒歩14分
4 吉田城鉄櫓 徒歩10分
5 本陣・脇本陣跡 徒歩10分
6 西惣門跡 徒歩7分
7 湊町公園・芭蕉の宿泊宿跡 徒歩8分
8 旧豊橋跡の碑 徒歩22分

浮世絵や弥次喜多道中の舞台を満喫

御油宿 赤坂宿

御油宿は江戸日本橋から数えて35番目、赤坂宿は36番目の宿場町。二つの宿はともに宿泊客の多い宿場で、その距離は1.7キロと東海道の宿場間でもっとも短い。そのため双方の客引き合戦も激しく、広重の『東海道五十三次』にもその様子が描かれているほど。また、その短さを芭蕉は「夏の月御油より出でて赤坂や」という句に詠んでいる。二つの宿の境界には現在も300本の松並木が600メートルに渡って続く(国天然記念物)。赤坂宿には江戸時代の建物のまま平成27年(2015)まで営業を続けていた大橋屋(旧旅籠屋)が公開されている。



③幕府の交通政策として植樹された、約300本の松の大き木が並ぶ。

③ 御油のマツ並木

松並木、旅籠をめぐり江戸の旅人気分

豊川市

名鉄国府駅より西へ進むと東海道に突き当たる。東海道と本坂道の分岐点であった御油の追分、御油橋を渡り旧御油宿へ。高札場跡を右に折れ直進するとT字路。東海道はこれを左折するが先に「御油の松並木資料館」に立ち寄る。東海道に戻り500mほど歩くと松並木が現れる。その先が旧赤坂宿。芭蕉句碑の関川神社、「大橋屋」の建物を訪ねよう。



①本坂道との分岐点で、常夜燈と道標がある。②御油宿の町並みの復元模型などの資料が揃う。④樹齢800年の楠の大き木と、芭蕉句碑がある。



所要時間	約1時間23分
距離	約4.2km
① 御油の追分と秋葉山常夜燈	徒歩10分
② 御油の松並木資料館	徒歩17分
③ 御油のマツ並木	徒歩11分
④ 関川神社	徒歩6分
⑤ 豊川市大橋屋(旧旅籠屋)	徒歩2分
⑥ 赤坂宿場資料室(豊川市生涯学習会館内)	徒歩22分

名鉄名古屋本線 国府駅
名鉄古庄本線 名電赤坂駅

⑤芭蕉が宿泊し、句を詠んだといわれる。
⑥赤坂宿の歴史を紹介。生涯学習会館内に設置。

information
 関 豊川市観光協会
 ☎ 0533-89-2206
 関 豊川市諏訪3-133
 プリオ5F
 【豊川市観光ボランティアガイド(豊川市観光案内所内)】
 FAX 0533-89-2412
 【豊川市観光案内所(電話受付はなし)】
 ※要予約 無料

四つの東海道

江戸時代、幕府の五街道第一とされた東海道は、京・大坂と江戸を結ぶ最重要幹線として整備された。9つの宿場があった愛知の旧東海道沿いでも、今なお往時のたたずまいを残した町並みや松並木、一里塚が見られる。しかし、東海道が東西交通の主要幹線になるのは江戸時代よりかは以前からである。

◆古代 東海道はもともと海沿いの道、「うみつみち」といわれ、都の東の伊勢に向かい伊勢湾を渡り、渥美半島の伊良湖から海岸線を通って東国に至る道だった。これが最古の東海道といわれる。その後、大化の改新を経て律令制の時代になると、都のある大和を含めた畿内五方国(五畿)とその外の諸国を七道(古代の行政地域)に分け、諸国に置かれた国府と国府をつなぐ「駅路」を通じた。この七道駅路のうち最重要路は大略と呼ばれた山陽道、中路は東海道と東山道、残り小路に分けられた。東海道は、伊賀、伊勢から尾張、三河を経て常陸までの15ヶ国とされた。この駅路は広く直線路とされ各所に駅家を設けて人馬を常備させたという。

◆中世 都が平安京に移り律令制が崩れるとともに古代の駅伝制は衰退したが、源頼朝が鎌倉に幕府を開くと、鎌倉を中心とした道を整備し、中でも京と鎌倉を結んだ「鎌倉街道」(京・鎌倉往還)と呼ばれた東海道を重視した。古代東海道は近江から鈴鹿峠を越えて伊勢

に入り、陸路尾張に至る「伊勢廻り」のコースがとられていたが、中世東海道は近江から美濃の不破(関ヶ原)を越え大垣、墨俣から尾張に入る「美濃廻り」のコースがとられた。室町時代後期の戦国の争乱は、東海道の各地でルートを荒廃させ、やがて中世東海道は崩壊した。一方、各地の戦国大名はその領国において政治・軍事・商業発展のため街道の整備や伝馬制を布いた。駿河・遠江の戦国大名・今川氏はやがて尾張国境まで進出したが、その領内の東海道は今川氏が整備したとされる。徳川家康の近世東海道の誕生以前、尾張の熱田、鳴海、三河の御油、赤坂には宿場的機能があったといわれる。

◆近世 慶長5年(1600)関ヶ原の戦いに勝利した家康は、東海道諸国を勢力下に置き、翌年江戸から京までの各宿場を指定し伝馬制を布いた。ここに近世東海道の原型が整えられた。慶長9年(1604)には江戸・日本橋を起点に里塚が築かれていった。なお、家康が定めた東海道の経路は熱田から海路

桑名に渡り鈴鹿峠を越える「伊勢廻り」コースである。「美濃廻り」の道は美濃路は、名古屋城の完成とともに整備された。大坂の陣、参勤交代制を経て交通政策を整えた江戸幕府は、東海道、中山道、日光海道、奥州海道、甲州海道の五街道と付属街道を道中奉行の管轄下におき、全国支配を強固なものにした。さらに幕府は豊臣家滅亡後、東海道大坂延伸に着手。大津宿西側の影茶屋追分から分岐し大坂に至る街道を整備し、これも東海道として管理した。東海道は江戸日本橋から京三条大橋までの「五十三次」とともに、江戸日本橋から大阪・高麗橋までの「五十七次」も併存していた。

享保元年(1716)、幕府は五街道の正式な呼び名を統。主要幹線道は海辺の道でなくとも「海道」と呼ばれていたが、東海道を除き日光・奥州・甲州の各「海道」を各「道中」と改称した。幕府公式文書でも「海道」は「街道」に、「中山道」は「中山道」に書き換えられていった。ただし般への普及は広まらず、以後も海道や中仙道が使われ続けた。

◆近代 明治新政府は、近代国家にふさわしい制度への変革を推し進めた。それは宿場や街道の交通にもおよんだ。明治2年(1869)には関所、翌年には本陣・脇本陣の名目が廃止された。同じ頃には「七里の渡し」や「三里の渡し」も廃止。また「海道」は「街道」に表記を統一された。そして、新政府が重点を置いた鉄道網の整備が推進され、明治22年(1889)東海道線(新橋―神戸間)が全通した。

地域とふれあう! 四季カレンダー

- 春 豊川市桜まつり (3月下旬~4月上旬) 桜の開花にあわせ各種行事が行われる。
- 夏 御油夏まつり (8月1土・日曜) 約3000発の打ち上げ花火が夜空を彩る。
- 秋 杉森八幡社祭礼(大名行列) (10月第2日曜) 赤坂宿で行われる壮麗な大名行列。
- 冬 国府の市 (2月11日) 旧東海道沿いに陶器市や植木市、露店などが並びにぎわう。



笠寺一里塚(名古屋市)

岡崎宿

東海道で最も屈折した二十七曲り

岡崎宿は江戸日本橋から数えて38番目の宿場町。岡崎は徳川家康が生まれた岡崎城の城下町であり、また矢作川の舟運による物資集積で栄え、東海道の宿場町では三番目の規模を誇った。岡崎城は城下町を堀や土塁で囲った外郭(惣構え)を持ち、東海道はその外郭内に通され、「二十七曲り」と呼ばれる屈折の多い道筋となっている。これは城の中枢(内郭)の防衛とともに多くの町屋を立ち並べる工夫ともいわれる。戦災や都市化により町並みは失われ道路は拡幅されたが、八丁味噌の蔵が立ち並ぶ通りは風景が一変する。



①(上)岡崎宿のシンボル：二十七曲りの出発点。(右上)歴史を知りルートを把握できる便利な案内の碑が道沿いに設置されている。②徳川家康が祖父松平清康と妹久姫の菩提を弔うために創建。楼門と白土塀が美しい。

岡崎市

名鉄東岡崎駅から名鉄バスに乗りし岡崎げんき館前バス停下車。南へ200mほど直進すると冠木門と二十七曲りの碑に至る。ここを起点に東海道で最も屈折した道筋を歩く。所々に案内柱や道標があるのでそれに従って歩く。コース終盤はほのかに味噌の香りが漂う八丁味噌の蔵の道に至る。時間と体力があれば岡崎公園(岡崎城)に立ち寄り寄ってもよい。



③岡崎信用金庫資料館 ④大正6年(1917)に建築。赤レンガと地元産の御影石を組み合わせたとルネッサンス風様式。⑤家康の故事にならない、毎年6月30日には厄除けの鳥居くぐりの神事が行われている。⑥道を挟んで光園寺の白壁と味噌蔵の黒壁のコントラストが約180メートルに渡って続く。

案内柱をたどりながら二十七曲りを歩く

地域とふれあう! 四季カレンダー

- 春 家康行列(4月)
春の風物詩。公募で選ばれた家康公はじめ武士団や姫行列など700名余が練り歩く。
- 夏 岡崎観光夏まつり
花火大会(8月第一土曜)
乙川河畔(殿橋下流)・矢作川河畔の会場でバラエティに富んだ花火が披露される。

味わいたい! 地元の名産品

八丁味噌
大豆と塩だけで作られた岡崎名産の伝統的な赤味噌。

(右)家康が三河統一の拠点とした城。復興天守内部は、歴史資料館。(左)三河武士の源流、松平氏の歴史などを時代順に展示している。

池鯉鮒宿

木綿市と馬市で知られた市場の宿

池鯉鮒(※)宿は江戸日本橋から数えて39番目の宿場町。かきつばたの名勝八橋と、ぎやかな市場で知られた。江戸時代、池鯉鮒は三河木綿の集積地となり木綿市が活況を博した。芭蕉も「不断たつ池鯉鮒の宿の木綿市」の句を残している。さらにその木綿を運ぶ馬も取引されるようになり、松並木の周辺で開かれた馬市には、甲斐や信濃の荒馬が集まり、商人や見物客でごった返した。その盛大さは広重の浮世絵にも描かれた。宿場町景観は失われたが、東海道三社の一つ知立神社や松並木が今なお残る。

*読みは「ちりゅう」ともそう



①名勝八橋の中心となる寺。境内の八橋史跡保存館では多数の文化財を所蔵。②江戸から数えて83番目の一里塚。街道両側の塚が残っている例は珍しい。

地域とふれあう! 四季カレンダー

- 春 史跡八橋かきつばたまつり(4月下旬~5月中旬)
八橋は在原平ゆかりのかきつばたの名勝。ゴールデンウィークごろが一番の見どころとなる。
- 知立まつり(5月2日・3日)
初夏を彩る知立神社の祭礼。本祭の時に山車上で上演される山車文楽・からくり人形芝居は必見。
- 知立公園花しょうぶまつり(5月下旬~6月中旬)
明治神宮から下賜された花しょうぶが紫や白の花を咲かせ目を楽しませてくれる。
- 秋 秋葉まつり(9月中旬)
知立神社で披露される炎の高さ7mを超える勇壮な手筒花火が見もの。

味わいたい! 地元の名産品

あんまき
ふっくらした皮と優しい甘みの餡が特色の銘菓。

知立市

古社古刹と松並木に街道のにぎわいをしのぶ

名鉄三河八橋駅で下車。南に進むと無量壽寺。さらに600m進むとT字路の交差点で東海道に突き当たる。右に折れ西に進むと来迎寺の一里塚、さらに高速道路下を渡る。松並木の道に至る。並木道を直進し地下道で国道下をくぐる。県道と交わる中町交差点を北西へT字路を右折し了運寺の門前を左折。地下道をくぐり、すぐ右折すれば知立神社参道に至る。



③広重の浮世絵にも描かれた馬市の碑。④知立神社の神主・永見氏の居館だった。⑤江戸時代には東海道三社の一つに数えられた。境内の多宝塔は国の重要文化財。



information
 岡 知立市観光協会
 ☎ 0566-83-1111
 所 知立市広見3-1
 【知立市観光ガイドボランティアの会】
 (知立市観光協会内)
 ☎ 0566-83-1111
 ※要予約 無料

→無量壽寺への道標として建てられた。来迎寺町と牛田町に現存。

- 1 無量壽寺 徒歩15分
 - 2 来迎寺一里塚 徒歩25分
 - 3 馬市の碑 徒歩25分
 - 4 知立古城址 徒歩10分
 - 5 知立神社 徒歩12分
- 所要時間 約1時間35分
距離 約6km



information
 岡 (一社)岡崎市観光協会
 ☎ 0564-64-1637
 所 岡崎市康生通東二丁目47番地
 【おさき観光ボランティアの会】
 ☎ 0564-23-3751
 ※毎日9:30~15:00(3月中旬~12月上旬、8月1土曜~お盆過ぎまで休み) ※要予約優先 無料

- 1 二十七曲りの碑と冠木門 徒歩35分
 - 2 随念寺 徒歩15分
 - 3 岡崎信用金庫資料館 徒歩45分
 - 4 新田白山神社 徒歩15分
 - 5 八丁蔵通り 徒歩10分
- 所要時間 約2時間5分
距離 約7.3km

鎌倉街道の面影

鎌倉街道とは、一般に源頼朝が鎌倉に幕府を開いて以来、各地から鎌倉に向かう主要な街道のこと。幕府によって全国各地に守護や地頭が置かれ、各赴任地に散った東国武士たちにとって「いざ鎌倉」の時に駆けつけるための道であった。その中で幕府が最も重要視した道こそが、東海道だった。

源頼朝は、鎌倉を根拠にして以来、京と鎌倉を結ぶ東海道を重視して文治元年（1185）、駅路之法を制定し、伊豆・駿河以西から近江まで伝馬を常備させた。この中世の東海道は「京・鎌倉往還」や単に「海道」と呼ばれた（江戸時代以降は「鎌倉街道（海道）」「鎌倉古海道」と呼ばれた）。

古代から平安時代の東海道は近江から鈴鹿峠を越えて伊勢を通って尾張に入る「伊勢廻り」コースだったが、中世の東海道は美濃の不破関（関ヶ原）を越えて青墓（大垣市）、墨俣から木曾川、長良川を越えて尾張に入る「美濃廻り」コースとなった。なお、どちらのコースも庄内川と五条川が交わる甚目寺町萱津（現あま市）で合流した。

愛知県内のルートは尾張では黒田、折戸（下津）、萱津、熱田、鳴海、沓掛、三河では八橋、八波木、作岡、山中、赤坂、渡津、今橋に宿があったとされる。ただし、平安時代後期から鎌倉時代初期の地殻や気候変化による海進現象のため、鮑海川（現豊川）の河口部の渡河

は不可能となり、新たに中流（豊川市当古付近）で渡河し、海岸部を避けた船形山越えのルートに変更されたという。全国を平定した源頼朝は、建久元年（1190）、上洛の途中この新たなルートをたどった。しかし、このルートも承久3年（1221）の承久の乱（以後、流域の変化があり元の海岸部のルートに戻ったといわれる。同じように熱田から鳴海に行く途中にあった鳴海瀧を渡る道も干潮の変化や土砂の堆積により時代によってルートが変わったという）。

鎌倉街道は、近世東海道よりさらに古いため、当時から今日にかけての土地そのものの変化や耕地化、宅地化によって道筋全てをたどることは困難である。唯一残された地名や伝承、文学作品とともに推定ルートが浮かび上がるが、愛知県では宮市木曾川町黒田、あま市萱津地区、名古屋瑞穂区・南区・緑区、豊明市沓掛町の二村山、知立市八橋町、豊橋市雲谷町や岩崎町などに古道の面影と史跡が伝えられている。

※承久の乱、後鳥羽上皇が鎌倉幕府に対し討幕の兵を挙げて敗れた争乱。

豊橋市

雲谷町の普門寺、船形山付近から岩崎町には頼朝ゆかりの史跡が残る。

1. 頼朝の庇護を受けた三河七御堂のひとつ。元は船形山の山岳寺院だが戦国時代に焼失。今川義元が再興した。
2. 普門寺から船形山峠に登る道。
3. 船形山山中の旧伽藍址。鎌倉街道はこの元堂付近を通っていたといわれる。
4. 頼朝が鞍を奉納したという。
5. 頼朝が愛馬を止め、休息した。
6. 普門寺峠より尾根根元を北へ。浜名湖が望める。



あま市

萱津地区には鎌倉街道の宿があった。五条川堤防沿いに史跡が残る。

1. 現代の道の下に鎌倉街道が眠る。
2. 日本武尊（やまとたけのみこと）と宮養媛（みややひめ）が逢えなかったという伝説にちなむ。
3. 祭神は鹿屋野比売神（かやのひめのかみ）。通称、漬物神社として親しまれる。
4. 扉の前の漬物石を3回なでると漬物上手になれる。



一宮市

木曾川町黒田には鎌倉街道の黒田宿（北宿と南宿）があったとされる。

1. 頼朝が上洛した際に剣と寺領を寄進。頼朝が死んだ時、その剣が光ったため剣光寺と呼ばれた。
2. 剣光寺の西北にある小さな橋。
3. 鎌倉街道を旅してきた人の馬が休息中に、池に飲み込まれたという。
4. 神社前の細い道が街道と伝わる。



知立市

知立市に残る鎌倉街道沿いには平安歌人在原業平ゆかりの史跡が点在する。

1. 歌人在原業平の菩提を弔うために業平塚が築かれた折に創建。
2. 根が2メートルほど持ち上がっていることから名づけられた。松の根元に「鎌倉街道之跡」の碑がある。
3. 在原業平が東国に下った時の言い伝えが伝説として残っている場所。
4. 鎌倉末期に業平をしのんで建立されたものと考えられる。



鞍掛神社（豊橋市）

*愛知県内では、上記以外にも鎌倉街道の痕跡や言い伝えが残る場所があります。

有松

〔有松〜鳴海〕

池鯉鮒宿と鳴海宿の間に設けられた「間の宿」有松は「有松絞り」で知られる。東海道を往来する旅人の土産物として考案された絞り染めは、やがて遠く江戸まで知れ渡り、街道筋の名産品へと育ち、財を築いた絞商たちの繁栄が町並みに印されている。その町並みは全国で唯一「染織町」として重要伝統的建造物群保存地区に選ばれ、さらに有松独自の伝統と文化のストーリーが評価され令和元年（2019）には日本遺産にも認定されている。広重が『名物有松絞』の画題で描いた絞り染め店と行き交う旅人になぞらえ街道散策が堪能できる。

地域とふれあう! 四季カレンダー

夏 有松絞りまつり (6月第1土・日曜)
旧東海道筋でイベントや絞り製品の販売が行われ、毎年15万人が訪れる盛大なまつり。

秋 有松山車まつり (10月第1日曜)
歴史ある町並みを背景に、山車の上でくりひろげられる「からくり人形」の実演が場所。

手に入りたい! 地元の名産品

有松・鳴海絞り工芸品
伝統の技を現代に生かした個性的な品が多数。

日本遺産認定の町並みで時を旅する

名古屋市

名鉄有松駅で下車。駅の南側に有松の町が広がる。一旦線路沿いに東に向かい、松野根橋を渡り町中に向かう。町並み保存地区内には絞商の豪壮な町家を中心に切妻平入形式の主屋が連続する。有松一里塚の前を通り、自動車道の高架下をくぐる。600mほど歩くと鳴海宿の東口の平部の常夜燈、さらに進み中島橋を渡り旧鳴海宿の町中に至る。



→「有松絞り」の開祖竹田庄九郎を称えた石碑が有松・鳴海絞会館の駐車場奥にある。

所要時間 約1時間 10分
距離 約4.2km

所要時間 約1時間 33分
距離 約5.3km

6 天神社 (徒歩5分)
5 瑞泉寺 (徒歩18分)
4 平部町常夜燈 (徒歩15分)
3 有松一里塚 (徒歩20分)
2 有松・鳴海絞会館 (徒歩22分)
1 有松山車会館 (徒歩1分)

名鉄名古屋本線 有松駅

Information (P19~21共通)
名古屋観光コンベンションビューロー
☎052-202-1143

鳴海宿

〔鳴海〜笠寺〕

鳴海宿は江戸日本橋から数えて40番目の宿場町。古来、鳴海の地は鳴海瀉と呼ばれた干潟が広がり歌枕に詠まれた景勝地であった。やがて鳴海丘陵（尾張丘陵）北端には社寺が多く立ち並び、桶狭間の戦いにもつわり城や砦も築かれた。その後、海退や干拓により陸地化が進み、東海道の道筋が定まり鳴海宿が置かれた。江戸中期には松尾芭蕉が四度訪ねている。鳴海も有松と同じく絞りの生産・販売を行い、「有松・鳴海絞り」とも呼ばれた。江戸時代から残る東西の常夜燈と数多い社寺が往時と変わらず存在する。

① 芭蕉最古の供養塔や芭蕉像が安置されている。芭蕉堂が残る。

② 宿場町の西の入り口に寛政4年（1792）に設置された。

③ 熱田神宮の東に位置するところから「東宮大明神」ともよばれていた。

② 丹下町常夜燈
① 誓願寺
③ 成海神社

歌枕や俳句に詠まれた干潟跡をゆく

名古屋市

名鉄鳴海駅を下車。北に200m進むと本町交差点。付近には芭蕉ゆかりの誓願寺も。西へ進む東海道はカーブして北へ向かう。丹下町常夜燈、成海神社を訪ね、再び東海道を北へ600mで芭蕉ゆかりの千句塚公園に至る。東海道は三王山交差点で北西に向かう。天白橋を渡り笠寺一里塚、緩やかな坂を上ると笠寺（笠寺観音）に至る。



地域とふれあう! 四季カレンダー

秋 成海神社例祭・鳴海祭(裏方) (10月第2日曜)
五穀豊穡を願い、4輛の山車と神輿が町を練り歩く。裏方とあるのは社が鳴海城の裏側に位置しているための呼称。

冬 笠寺観音節分会 (2月2日、3日)
毎年2月2日に節分会前夜祭、翌3日に節分会、豆まき祈禱を開催。

↑ 銀行店舗前に復元された高札場がある。

6 笠寺（笠寺観音） (徒歩3分)
5 笠寺一里塚 (徒歩8分)
4 千鳥塚 (徒歩20分)
3 成海神社 (徒歩15分)
2 丹下町常夜燈 (徒歩5分)
1 誓願寺 (徒歩15分)

名鉄名古屋本線 本笠寺駅

東海道で最大規模を誇った宿場町

熱田宿

〔笠寺〕熱田

熱田宿は、江戸日本橋から数えて41番目の宿場町。熱田神宮の門前町でもあったことから「宮宿」とも呼ばれた。名古屋城下へ至る美濃路の分岐点であり、桑名まで海路七里の日和待ちの大名や旅人が宿泊したため、東海道随一の規模を誇った。天保14年（1843）の記録では本陣2軒、脇本陣1軒、旅籠248軒のほか、尾張藩の浜御殿や奉行所などが立ち並んだ。戦災と戦後復興、道路敷設により東海道や町は分断された。しかしかつての船着場跡に常夜燈が復元され、戦火を免れた旅籠屋建物*が往時の名残をとどめている。

*丹羽家住宅は、脇本陣格の旅籠屋だった。



① 徳川家康四男の松平忠吉が創建した。② 人々が湯を浴びせ祈願したといわれる湯浴地蔵が安置されている。③ 織田信長が整備した浜の道（熱田～笠寺）に松並木が植えられ海から見る一筋の縄に見えたという。宮宿まで八丁の距離があったことから八丁縄手とよばれた。④ 小田原の陣で病死した息子を思う母の気持ちを刻んだ擬宝珠の名文で知られる。⑤ 三河と熱田をめぐる不思議な由来を持つ石地蔵を祀るお堂。⑥ 「七里の渡し」の船着場跡。常夜灯と時の鐘やぐらが復元されている。

名古屋市

名鉄本笠寺駅下車し、北に進むと東海道に突き当たる。しばらく住宅街を歩く。400mほど進むと左手に富部神社の社叢や呼続公園の木々が見える。さらに進み山崎の坂道を下り、山崎橋を渡る。都市高速道下を走る堀田高岳線（空港線）の松田橋交差点で東海道は、国道下に消える。国道脇の歩道を進み、JR東海道本線ガード下をくぐると再び東海道の宿場町があった場所に至る。



東海道一にぎわった町の面影をたどる

地域とふれあう! 四季カレンダー

夏 熱田まつり (6月初旬)
旧東海道筋でイベントや餃子製品の販売が行われ、毎年15万人が訪れる盛大なまつり。

味わいたい! 地元の名産品

ひつまぶし
刻んだ蒲焼きを用いたなごやめしの代表。

城下町名古屋をめぐる街道

都や主要な城下町から外に延びる街道の出口を何々口と称したが、名古屋城下の主な出口は五つあり、俗に「名古屋の五口」と呼ばれた。第一は佐屋路や東海道に出る熱田口、第二は美濃路や途中で分岐する岐阜街道に出る枇杷島口、第三は木曾街道に出る志水口（清水口）、第四は下街道（善光寺街道）に出る大曾根口、第五は駿河街道や伊那街道（明治9年（1876）以降の飯田街道）に出る三河口であった。



尾張地域は古代から交通の要地であり、北に中山道（東山道）、南に東海道が走り、その二つの幹線道が最も接近する場所であった。清須越にはじまる名古屋城下町の建設は、同時に町と東海道・中山道との直結、さらに美濃・木曾の重要地域への街道新設が目論まれていた。

慶長15年（1610）、徳川家康は名古屋城の築城と城下町建設、運河開削（堀川）を行うとともに、戦国時代に清須城と那古野城（名古屋城の前身）を結んでいた街道や、信長死後、清須城主になった二男・織田信雄が美濃へ通じるために開いた道などを整備し、これを名古屋の城下町に通じた。この道が美濃路で、五街道に並ぶ重要な道として幕府が管理した。

さらに家康は慶長17年（1612）、大坂の豊臣方との決戦に備え、熱田を通らず名古屋と岡崎を結ぶ最短ルートとして駿河街道と平針宿を開設した。この道は、その後の大坂の陣の時、家康とその軍勢が利用し大坂に向かっている。

大坂夏の陣後、元和元年（1615）、木曾地方とその山林が尾張藩領となり、これを受け元和9年（1623）、藩によって名古屋と木曾地方を結ぶ木曾街道が開かれた。木曾領を得た尾張藩では、参勤交代の経路に木曾街道・中



所要時間 約1時間45分

距離 約6km

名鉄名古屋本線 本笠寺駅 徒歩10分

- 1 富部神社 徒歩10分
- 2 地蔵院 徒歩20分
- 3 八丁驛公園 徒歩20分
- 4 姥堂・裁断橋跡 徒歩10分
- 5 ほうろく地蔵 徒歩10分
- 6 熱田湊常夜燈・宮の渡し公園 徒歩18分
- 7 上知我麻神社（熱田神宮摂社） 徒歩7分

地下鉄名城線 伝馬町駅

⑦ 江戸時代は源太夫社とよばれ、⑤「ほうろく地蔵」の位置に鎮座していた。昭和24年（1949）に熱田神宮境内に遷座した。

1 美濃路

名古屋城下を通り、東海道(熱田(宮)宿)と中山道(垂井宿)を結んだ街道。東海道の付属街道であり、宿場は名古屋・清須・稲葉・萩原・起・墨俣・大垣の七宿を数えた(大垣以外は尾張藩領)。参勤交代にも利用され、また朝鮮通信使、琉球使節、御茶壺道中が通った。



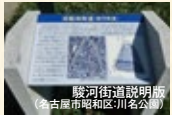
旧枇杷島橋案内(名古屋西區)

2 岐阜街道

美濃路の四ツ家で分岐し、一宮、黒田を経て木曾川を渡り、美濃国に入り笠松、中山道加納宿を経て岐阜町(尾張藩領)に至る街道。

3 駿河街道

徳川家康が熱田(宮)を通らず、名古屋と岡崎を直接結ぶために開いた街道。岡崎街道ともいう(※名古屋から平針までを駿河街道として、平針から岡崎までを岡崎街道や平針街道とする説もある)。豊臣方との決戦を控えた当初は軍事情報が強かったが、泰平の世となると平針・岡崎間の重要性が下がり、平針経由で接続していた伊那街道との結びつきが強まり、信州に向かう重要な交通路に変わっていった。*明治9年(1876)に伊那街道が東三河等飯田街道とされ、のちに名古屋・平針間の駿河街道も含まれ、現在に至っている。



駿河街道説明版(名古屋昭和区川名公園)

4 塩付街道

江戸時代初期、名古屋南部から旧愛知郡の海岸部の星崎七ヶ村(名古屋南区星崎)には塩浜が広がり前浜と呼ばれた。ここで生産された塩を内陸に運んだ街道。街道は伊那街道と瀬戸街道(品野街道)、下街道と合流し、塩は信州に運ばれた。



石仏町の旧街道(名古屋昭和区)

5 木曾街道(上街道)

上街道ともいう。幕府から木曾の山林を拝領された尾張藩が開発した藩営街道。名古屋城下から小牧宿、桑田、善師野宿、美濃国土田宿を経て太田宿付近で中山道に合流する。



下町の旧街道(小牧市)

6 稲置街道(犬山街道)

尾張藩が木曾街道を開いた後、尾張藩重臣で犬山城主の成瀬正虎が開いた。木曾街道の桑田宿分岐で分岐し、犬山城下に至る街道。



本町通の風景(犬山市)

7 下街道(善光寺街道)

日本武尊の東征の帰りの道という伝説が残る。道木曾街道を「上街道」と呼ぶのに対し、「下街道」と呼ばれた。名古屋大曾根から勝川、内津を経て美濃国へ入り中山道に合流する。名古屋から木曾方面に出るのに木曾街道に比べ距離も短く、平坦であったため、善光寺参りや伊勢参りの庶民をはじめ、物資の輸送でにぎわった。



道標(名古屋東區)

8 岩倉街道

美濃路の下小田井で分岐し岩倉、小折(江南市布袋)に至る街道。江戸時代、枇杷島橋西詰め、下小田井の市場が設けられ、尾張北部でとれた青物がこの道を通り名古屋城下下運ばれた。



中小田井の旧街道(名古屋南區)

9 八神街道

美濃路を清須宿で分岐して矢合、祖父江を経て木曾川を渡り、美濃国・八神に至る街道。八神には関ヶ原の戦い後、家康(後に尾張徳川家)に仕えた毛利家(河内源氏末裔)の八神城があった。街道はそのままた北上し、長良川を渡り、中山道へ合流した。

10 佐屋路

東海道・熱田(宮)宿と桑名宿を海路で結んだ七里の渡しを避ける東海道のバイパス道。東海道佐屋廻りと呼ばれた。宿場は、岩塚・万場・神守・佐屋の四宿を数えた。佐屋湊からは桑名宿までは船で佐屋川、木曾川を渡った。佐屋宿は渡し場がある重要な宿で、将軍や紀州徳川家などの賓客用の佐屋御殿がもうけられていた。



道標(名古屋南區熱田区)

11 津島街道

中世の津島は木曾川の支流が流れ込み川湊として栄えた。美濃路の須ヶ口から分岐して津島に至る古くからの道。上街道とも呼ばれた。甚目寺から勝幡までは古代条里制の遺構を利用して、ほぼ一直線の道筋となっていた。津島神社への参詣の道としてもにぎわった。



道標(津島市)

13 瀬戸街道(品野街道)

名古屋城下の大曾根から瀬戸・品野、美濃国・柿野を経て信州へ通じた中馬街道だった。江戸後期以降は、瀬戸周辺で焼かれた陶磁器の運搬道となった。

14 水野街道

尾張藩初代藩主徳川義直が鷹狩を行い、その風光を愛した水野の地。義直は定光寺を自らの墓所とした。歴代藩主が、藩祖を祀るこの道を通ったため「殿様街道」ともいう。瀬戸街道の新居で分岐し、水野から美濃国に入り下街道に合流した。



定光寺(瀬戸市)

15 伊那街道(飯田街道)

平針から赤池、足助、節、稲橋を経て信州伊那谷に至った道。古くから尾張・三河と信州を結んだ要路。戦国期には武田信玄や織田信長の軍用道としても利用された。江戸時代以降は交易路として、中馬街道、塩の道、信州では三州街道ともよばれた。中馬の荷駄が往来し、信州からは本地産や山産の産物が、名古屋から塩や海産物が運ばれた。*吉田(豊橋)から新城、田口、津具を経て信州伊那谷に至った街道も「伊那街道」とよばれていた。地域により「伊奈の表記」・「伊那」の表記があった。



中馬の道に残る馬頭観音(豊田市足助町)

16 挙母街道

伊那街道の赤池から分岐し、和合を経て三河国に入り、挙母城下に至る街道。さらに矢作川を渡り、尾張藩の重臣渡邊家の所領地である寺部の南を通り、七里街道(足助街道)に合流していった。明治以降に新城まで通じた。

17 西浦街道(常滑街道)

東海道の鳴海宿で分岐し、大高、横須賀、大野、常滑に至る街道。知多半島の西側を通るため西浦街道と呼ばれた。尾張藩二代藩主徳川光友は横須賀に御殿を建て、しばしば来臨した。



大高の旧街道(名古屋南區)

18 東浦街道(師崎街道)

海を面した知多半島の物資輸送は、海路が中心であったため、特に南部の陸路の整備は進まなかった。東海道の池鯉鮒(知立)で分岐し刈谷、緒川、半田、河和を経て師崎まで至る街道。知多半島の東側を通るため東浦街道ともいう。*東海道の起点を東阿野(豊明市)とし以降、大府、緒川、半田、河和、師崎に至る道という説もある。



緒川の旧街道(東浦町)

19 大野街道

池鯉鮒(知立)や刈谷方面から東浦街道へ入り半田から知多半島を横断し、大野の至る街道。大野湊(常滑市大野)から伊勢湾を渡り、白子湊(しるこみなと/鈴鹿市)に入って、京や伊勢詣でに行く旅人もあった。

20 半田街道

常滑街道の名和(大高)という説もある(から分岐し、半田に至った道)。



● 江戸幕府管轄の宿場町
○ 主な町・村
◇ 湊(河湊を含む)
□ 城(一万石以上の城)

*上記地図は、江戸期の尾張地方の全街道図ではありません。また地形や河川の形状はおおよその位置であり、略図としてご覧ください。

地域とふれあう! 四季カレンダー

- 春 提灯祭り**(6月第3土・日曜日)
八坂神社の夏まつり。境内に沢山の提灯が飾られ、中でも高さ約20mの竿に吊るした「山笠提灯」は見物。
- 夏 円頓寺七夕まつり**
(7月最終水曜日から5日間)
アーケードには各店舗などが作成した張りぼてや装飾、出店が並ぶ。



- ①堀川七橋のひとつ。美濃路がこの橋を通っていたため江戸時代は一番のきわいであつたといわれる。
- ②元は清須を流れる五条川に架かっていたものを「清須越」の際一緒に移した橋。現在の橋は昭和13年(1938)に架け替えられたもの。



- ③新道六箇寺のひとつ。尾張徳川家初代徳川義直は、鷹狩に行った際にここでよく小憩したという。
- ④榎権現で親しまれる。織田信長が桶狭間の戦いの際、戦勝祈願に太刀一口を寄贈したといわれる。
- ⑤長寿延命と豊作祈願の提灯祭りが有名。



⑥江戸時代の枇杷島橋が架かっていたとされる位置に設置。江戸時代の橋は川の中にあつた中島を中継し二つの橋が架かっていた。

information
 名古屋観光
 コンベンションビューロー
 ☎052-202-1143



6	旧枇杷島橋 案内板	徒歩10分
5	八坂神社	徒歩15分
4	白山神社	徒歩7分
3	海福寺	徒歩18分
2	五条橋	徒歩27分
1	伝馬橋	徒歩12分

所要時間 約1時間48分
距離 約6km

地下鉄有線線/丸の内線
丸の内駅

名古屋宿

〈丸の内〜東枇杷島〉

東海道と中山道を結んだ陸路の道

美濃路は、東海道の熱田宿(宮)と中山道の垂井宿を結んだ東海道の脇街道。宿場は名古屋、清須、稲葉、萩原、起、墨俣、大垣の七宿が置かれた。幕府の規定によれば、各宿には中山道と同じく50人・50疋の人馬が置かれ、五街道に次ぐ重要な街道とされた。このうち名古屋宿は特殊な宿場だった。本陣、脇本陣、旅籠はなく將軍や朝鮮通信使らの休泊を担った^(*)。また名古屋宿の札の辻は、美濃路をはじめ、信州に至る飯田街道^(**)、中山道伏見宿に通じる木曾街道、中山道大井宿に通じる下街道、各街道の起点であつた(P.22参照)。

- *1 諸大名は通過させ、一般の旅人は宿場に近き玉屋町(名古屋市中区)の旅館を利用させた。
- *2 江戸時代は駿河街道、伊那街道

清須越由来の橋、蔵の道、古民家が残る道

名古屋市

名古屋宿は、東海道の熱田宿(宮)と中山道の垂井宿を結んだ東海道の脇街道。宿場は名古屋、清須、稲葉、萩原、起、墨俣、大垣の七宿が置かれた。幕府の規定によれば、各宿には中山道と同じく50人・50疋の人馬が置かれ、五街道に次ぐ重要な街道とされた。このうち名古屋宿は特殊な宿場だった。本陣、脇本陣、旅籠はなく將軍や朝鮮通信使らの休泊を担った^(*)。また名古屋宿の札の辻は、美濃路をはじめ、信州に至る飯田街道^(**)、中山道伏見宿に通じる木曾街道、中山道大井宿に通じる下街道、各街道の起点であつた(P.22参照)。



名古屋宿/札の辻跡(本町通・伝馬通交差点)(名古屋市中区)



旧枇杷島橋案内板(名古屋市区)



清須宿/清須宿本陣跡(清須市)



稲葉宿/稲葉宿本陣跡ひろば(稲沢市)



萩原宿/正瑞寺(一宮市)



起宿/富田一里塚(一宮市)



起宿/旧湊屋文衛門邸(一宮市)

愛知の美濃路

美濃路は、東海道と中山道を結んだ重要な街道。陸路の道ゆえ將軍の上洛に、朝鮮通信使や琉球使節の貴人、そして將軍家へ献上された象も運ばれた。新たな道と交わり生活道路として生まれ変わった今もなお、街道風景や史跡とともに時を刻む。さあ、美濃路へ。



地域とふれあう！ 四季カレンダー

- 春 稲沢桜まつり** (4月上旬)
国府宮参道一帯で開催。3月下旬から4月上旬にはライトアップも行われる。
 - 夏 尾張西枇杷島まつり** (6月上旬土・日曜)
200余年の伝統ある山車がひき回され、美濃路に夏の訪れを告げる。
 - 秋 清洲城ふるさとまつり** (10月1日~30日)
清洲城を中心に1カ月間にわたり、時代行列や火縄銃演武、各種アトラクションを開催。
 - 冬 清洲城で初日の出** (1月1日)
毎年元旦の午前6時30分から城を開館し、清洲城主閣から初日の出を望むイベント。
- 天下の奇祭 国府宮はだか祭** (旧暦正月13日)
42歳と25歳の厄年を迎える男性を中心に、サラシの褌に白足袋姿の数千人の裸男が集まり、厄除けを祈願する奇祭。

味わいたい！ 地元の名産品

土田南瓜カレー (清須市)
清須特産の土田かぼちゃを使ったカレー。

- ④美濃路と岐阜街道の分岐点を示す。
- ⑤豊田秀吉の五奉行の一人であった長束正家の屋敷があった地。
- ⑥農業守護、厄除けの神として信仰される「尾張大國霊神社(国府宮)」の一の鳥居。



①元は、織田信雄が父・信長の菩提寺として建立。清須越で移転した後、新たに建立された。
②南北朝時代の寄木造による秘蔵・虚空蔵菩薩坐像を安置する。
③(道標)岐阜街道との分岐にあたる四ツ家追分にあった道標。長光寺門前に移築された。(町並み)長光寺付近は古い建物と現代的な民家が混在している。(六角堂)長光寺のシンボル六角堂。六角形をした珍しい形の地蔵堂。(井戸)織田信長が愛飲したと伝わる「臥松水」といわれる井戸。



③長光寺付近の町並み

清須市・稲沢市

城下町らしさ
信長の面影を感じるコース

JR清洲駅の東側から街道を歩くと、三差路や見通しの悪い曲がり角など、城下町らしい道が残る。長光寺前には四ツ家追分の道標など、街道の旧跡も見逃せない。また織田信雄が父・信長の菩提寺として建てた総見院や、信長が愛飲した井戸水が湧いていた「臥松水」のある長光寺など信長ゆかりの地も多く、歴史の鼓動を感じることができるコースだ。



所要時間 約1時間 47分	距離 約6.4km
⑥ 国府宮一の鳥居 (徒歩15分)	⑤ 長束正家邸跡 (石碑) (徒歩23分)
④ 四ツ家追分跡 (石碑) (徒歩35分)	③ 長光寺 (徒歩5分)
② 亀翁寺 (徒歩10分)	① 総見院 (徒歩4分)



(右) 琉球使節や参、茶壺道中など多くの旅人が行き交った美濃路。(左) 屋根の上に祀る名古屋独特の屋根神様。秋葉、津島、熱田の三社を祀っている。
須ヶ口一里塚跡
一休庵
(右) 「須ヶ口一里塚跡」の東にある「一休庵」。清須の特産品を販売。(左) 「須ヶ口一里塚跡」。熱田宿から古渡、江川を経て3つ目の一里塚。

美濃路は、信長死後、清須城主となった織田信雄(※1)が清須から美濃方面へ至る道を改修したのが始まりといわれる。さらに信雄の後、城主となった豊臣秀次が伝馬制を敷き、清須、墨俣、大垣が宿駅となっていた。清須は、室町時代後期以降、尾張の中心となったが慶長15年(1610)の清須越で町は一旦寂れた。しかし、美濃路が整備され新たに宿場が置かれ町は再びにぎわいを取り戻した。稲葉宿(※2)は、美濃路では最も多い3か所の問屋場が設けられていた。稲葉村と小沢村の二村で宿駅機能を務めていたが明治20年(1887)に二村が合併し、稲沢村となり現在の市名となった。

*1 信長 勇。名の読みはのぶかつ「のぶお」の2つの説がある。
*2 稲葉宿ルート 史跡紹介はP.29に掲載

清須宿 稲葉宿

信長をはじめ武将たちの面影に出会う



所要時間 約2時間 2分	距離 約7.2km
⑦ 清洲城・清須古城跡 (徒歩23分)	⑥ 清須宿本陣跡 (徒歩13分)
⑤ 清涼寺・札の辻 (徒歩3分)	④ 新川橋橋詰ポケットパーク (徒歩50分)
③ 大宝塔(瑞正寺) (徒歩5分)	② 飴茶庵 (徒歩1分)
① 西枇杷島問屋記念館(旧山田邸) (徒歩15分)	① 西枇杷島問屋記念館(旧山田邸) (徒歩12分)

清須市

風情ある町家を眺め、清洲城へ向かうコース



①山田九左衛門家を移築した「問屋記念館」。問屋の暮らしぶり学べることができる ②町家を改修した休憩所「飴茶庵」。駄菓子やガチャラリーがある



③高さ3.6mの宝塔。寺の北に刑場があったことから罪人を吊つために建立。
④新川橋西詰にあるポケットパークには街道の道標や新川開削の碑などがある。
⑤寺の前の角に高札が立ち、「札ノ辻」と呼ばれていた。
⑥美濃路最大の建坪を誇ったが、地震や火災で正門だけが残る。
⑦平成元年(1989)に建設された模擬天守。館内は歴史資料館。



(町並み) 古い町家や蔵が多く残り、宿場町ならではの風情を色濃く伝えている。
 ①美濃路で唯一両側に塚が残る「富田一里塚」。西側には公園が整備されている。
 ②織田信長と舅の斎藤道三が会見したと伝わる聖徳寺があった場所。



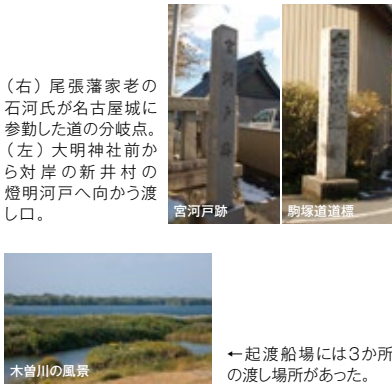
起宿の町並み



一宮市

水陸交通の要として栄えた起を目指すコース

名鉄萩原駅からまずは富田の一里塚へ。街道の両側に榎の木が残り、美濃路で唯一原形をとどめる貴重な一里塚である。美濃路をしばし逸れて、織田信長と舅の斎藤道三が初対面した聖徳寺跡へ立ち寄り、そのまま北へ向かう。木造の町家が点在する起の宿場跡で歴史の薫りに包まれながら木曾川の渡船場跡に着くと、尾張側の美濃路は終点となる。



←起渡船場には3か所の渡し場があった。

information

問 稲沢市観光協会
 ☎0587-22-1414
 稲沢市朝府町15-12
 稲沢市産業会館内
 【稲沢市観光協会観光ボランティア】
 ☎0587-22-1414
 (稲沢市観光協会事務局内)
 ※要予約・無料

問 一宮市観光協会
 ☎0586-28-9131
 一宮市本町2-5-6
 一宮市役所内
 【尾張一宮観光ガイドボランティア】
 ☎090-1478-9192
 ※要予約・無料
 実費(交通費・資料代等)負担

- ① 富田一里塚 徒歩53分
 - ② 聖徳寺跡 徒歩13分
 - ③ 起宿脇本陣跡(旧林家住宅)・一宮市尾西歴史民俗資料館 徒歩1分
 - ④ 問屋場跡(石碑) 徒歩12分
 - ⑤ 旧湊屋文右衛門邸 徒歩1分
 - ⑥ 起渡船場跡・定渡船場跡・常夜燈 徒歩11分
- 所要時間 約1時間48分
 距離 約6.4km



①美濃路稲葉宿本陣跡ひろばの門前には稲葉宿本陣跡の石碑が立つ。②3つの問屋場の内、中間屋場を務めていた伊東氏邸前。③南へ続く津島道を示す道標。「右つしま道三里」と刻まれた石の門柱。

稲葉宿 萩原宿 起宿

川面を渡る風とともに尾張側の終点へ

美濃路は、濃尾平野を貫く道のため平坦な道が続くが、美濃国では大川が多かった。輪中地帯を流れる掛斐川(佐渡川)、長良川(墨俣川)、境川(小瀬川)、尾張と美濃の国境を流れる木曾川(起川)はいずれも渡船による通行であった。一方、尾張国では庄内川に枇杷島橋、日光川(萩原川)には萩原橋が架けられていた。萩原橋のあった萩原宿は、小さな宿場だったが、幕府の巡見使が通った巡見街道が交わり、西美濃に続く多良街道の起点でもあったため陸上交通のターミナルでもあった。起宿は、木曾川を渡る起渡船場のある宿場町で、水陸交通の拠点として栄えた。わい、明治時代以降も織物の町として栄えた。

地域とふれあう! 四季カレンダー

- 春** 桃花祭(4月1日~3日)
真清田神社の例祭。短冊祭、歩射神事、神輿渡御(みこしとぎよ)のほか、武者行列など見所も多い。
- 全国選抜チンドンまつり(5月下旬)
萩原商店街で開催。全国から集まるチンドンマンがパフォーマンスを披露する。
- 秋** びざいまつり(10月4日曜・前日)
十二単衣を着た織姫、童女が登場する織姫パレードや仮装パレードが町を盛り上げる。
- もみじまつり(11月下旬)
一宮市尾西歴史民俗資料館別館・旧林家住宅で、庭園の紅葉の中で邦楽などの演奏会を開催。
- そふえイチョウ黄葉まつり(11月下旬)
稲沢市祖父江町をイチョウが黄金色に彩る季節に合わせて和太鼓の演奏や多彩なイベントを開催。

味わいたい! 地元の名産品

祖父江ぎんなん(稲沢市)
日本を代表する産地。菓子や麺など加工品もある。



④三代將軍徳川家光が旅館にしたほか、朝鮮通信使や琉球使節とも関係が深い。⑤街道沿いにある中嶋宮の鳥居。社殿は離れて建ち、隣接して長隆寺がある。⑥正瑞寺の前には高札場が置かれていた。⑦萩原宿は上町と下町に問屋場が置かれていた。上問屋跡に石碑が建っている。

稲沢市 一宮市

東、中、西に問屋場が置かれていた稲葉宿。中間屋場を務めた伊東家の前には現在石碑があり、格子の立派な町家造りが歴史を伝えている。三代將軍徳川家光が上洛した際に宿とした禅源寺や、街道沿いに鳥居がある中嶋宮を経て立場茶屋のあった高木へ。茶屋で一服する人々の賑わいを思い浮かべながら、国道155号を越えて萩原宿へ向かう。



(右)商店の横に残る高木一里塚跡の碑。明治の初めまで榎が残っていた。(左)串作庄屋・佐藤家跡。徳川家茂が上洛の際休憩した地。

- ① 美濃路稲葉宿本陣跡ひろば 徒歩5分
 - ② 稲葉宿問屋場跡 徒歩1分
 - ③ 津島道道標 徒歩9分
 - ④ 禅源寺 徒歩30分
 - ⑤ 中嶋宮・鳥居 徒歩52分
 - ⑥ 正瑞寺 徒歩3分
 - ⑦ 萩原宿問屋場跡 徒歩13分
- 名鉄名古屋本線
 名鉄尾西線 萩原駅
 所要時間 約2時間20分
 距離 約8.4km

八事、平針、足助

中馬が往来した交易の道と商家町

飯田街道はその道筋に多くの峠道があったが、名古屋城下を出て最初の峠道が八事山であった。当初この道は軍用道であったが、やがて交易の道として役割を変え、また風光明媚な八事山の山々には、「山行き」と称し文人や庶民たちが通った。明治末期には鉄道馬車も敷かれ行楽地としてにぎわった。八事山を越えた道は、平針から赤池、田粉、上伊保、四郷、御船、枝下、さらに力石峠を越えて力石、足助に至った。足助は中馬によって運ばれた物資の集積地として人馬が行き交い栄えた商家町。足助川に沿う段丘上に位置する町並みにその繁栄の証を今に伝え、平成23年(2011)に愛知県初の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

*赤池は日進市。田粉、上伊保、四郷、御船、枝下、力石、足助はいずれも豊田市に含まれる。明治に入り四郷から力石までの街道のルートが幾度か変更されている。



① 愛知県下唯一の木造五重塔は、国の重文指定。興正寺は、街道の峠道を守る「砦」の役割を担っていた。② 祭神は、製塩の技術を伝えた神であり、現在は安産の守護神とされる。③(右)八幡宮境内には、前方後円式古墳の一部が残る。(左)八幡宮門前の真向かいに馬頭観音がある。



地域とふれあう! 四季カレンダー

春 中馬のおひなさん(2月上旬～3月上旬)
足助の家々や商家に伝わるおひなさんや土ひなが軒先などに飾られ、町を彩る。

夏 足助夏まつり(8月初旬～15日)
町内に約6000本のろうそくが灯される足助川万灯まつりや灯ろう流しなどを開催。

秋 香風溪もみじまつり(11月上旬～12月上旬)
祭り期間中はライトアップや茶会、和太鼓の演奏も。見ごろは11月中旬から12月上旬。

味わいたい! 地元の名産品

もみじの衣揚げ
もみじの葉を塩漬にして揚げた名産品。

information

豊田市足助観光協会
☎0565-62-1272
〒豊田市足助町富平34-1

【三州足助ボランティアガイドの会】
☎0565-62-1272(足助観光協会内)※要予約・無料(案内中の入館料等については、実費を負担)



豊田市

足助は戦国時代、足助城山麓の集落を形成し、江戸時代に入ると宿場的要素に加え、塩問屋を中心に商業の町として発展した。太平洋岸と山岳地帯を結ぶ交易の要路となった街道沿いには、今なお白壁の土蔵や重厚な造りの町家が軒を連ね、往時をしのばせる。南北朝時代の伊良親王ゆかりの史跡や紅葉で名高い香風溪など見どころの多いコース。

商人の心を伝える古い町並みを歩くコース

おいでんバス 足助大橋	所要時間 約2時間 42分	距離 約8.7km
① 馬頭観音と牛馬撰待水	徒歩15分	
② 宗恩寺	徒歩8分	
③ 足助中馬館	徒歩19分	
④ 大給松平家先祖の墓	徒歩5分	
⑤ 百年草	徒歩13分	
⑥ 伊良親王袈裟かけ石	徒歩34分	
⑦ 城跡公園 足助城	徒歩32分	
⑧ 香積寺	徒歩23分	

名古屋市

江戸時代は、城下を出て最初の山道が八事山だった。五重塔がそびえる興正寺から、今はビルや住宅地の間を通る旧道へ東へ歩く。風景は違っても、勾配は山道を感じさせる。途中、街道から外れ案内板に従い塩竈神社へ。急坂道を下り国道153号線に戻る。植田川を渡り、家康が設置させた平針の旧宿場へ。わずかに残る古い家屋が歴史を感じさせる。

八事山から家康ゆかりの平針宿をたどるコース



→平針宿を通った街道は、平針街道とも姫街道ともよばれていた

information

名古屋観光コンベンションビューロー
☎052-202-1143

地下鉄鶴舞線 赤池駅	所要時間 約2時間 16分	距離 約8.2km
① 八事山興正寺	徒歩15分	
② 塩竈神社	徒歩20分	
③ 植田八幡宮・馬頭観音	徒歩24分	
④ 原の道標	徒歩17分	
⑤ 秀伝寺	徒歩10分	
⑥ 秋葉山慈眼寺	徒歩23分	

足助の塩

かつて日本では、塩の生産は海辺に限定されていた。そのため内陸へは陸路を利用するか、もしくは川船で河川をさかのぼり、馬の背に載せ替えて内陸へと運ばれた。水運や陸路で足助に集められた各地の塩は、新たな俵に詰め直し信州に運ばれた。これが「足助塩」と呼ばれた塩である。

◆家康のお墨付きを得た岡崎の塩座と、塩の道の拠点、足助。

江戸時代、三河湾から矢作川を船で運ばれた塩は、岡崎の塩座と呼ばれる塩商人の組織に納めることが義務付けられ、塩座を通さなければ入手できなかった。戦国時代、松平氏の軍事物資を扱っていた商人たちが信州に塩を販売していた。彼らは、家康の命で三河侵攻を意図する武田信玄の軍勢の物見役を務めた。その功績を称え、家康が塩座の特権を与えたことにはじまりといわれる。矢作川を上る塩船は、岡崎から上流へ直接の移入が禁止されたため、一旦すべての塩を陸揚げして塩座に通し、運搬しなければならなかった。塩座は、岡崎藩以外の他領にまで影響を及ぼすほどの権限があったとされるが、明治維新を機に廃止され、自由な売買が可能となった。

一方、岡崎の塩座の影響を受けていた足助の塩問屋は、その消滅により塩の商いがいっそう活発となり、明治20年代にいたっても13軒の塩問屋を有するなど繁

栄が続いた。三河産の塩をはじめ、半田の成岩塩、西国塩など各地の塩が移入された足助の塩問屋では、長く険しい山道輸送に備えるために塩の包装を整える「塩ふみ」「塩なおし」という作業を行っており、足助の田町にあった葺屋にも、塩なおしの作業場があった。詰め直された塩は、伊那地方で「足助塩」と称された。塩なおしが行われた背景には、産地による1俵あたりの内容量の違いを統一する目的などもあった。

足助の塩問屋では、目方を1俵あたり7貫目(約26kg)に合わせ、馬1頭の背に4俵ずつ載せて運ばれた。明治時代の記録によると、年間2万俵を超える塩が、中馬により足助から信州に運ばれたとされ、街道は「中馬街道」や「塩の道」と呼び表わされた。

しかし、明治末期に国鉄中央線が全通するなど鉄道の発展が著しくなると、塩をはじめとした物資の輸送も鉄道利用へと移行し、宿場の賑わいは姿を潜めていく。大正中期、葺屋の廃業を持って「足助塩」は姿を消すことになった。



現在の瓦屋外観



宗恩寺から見た足助の町並み(豊田市)

南朝の皇子や武田家ゆかりの道は信州へ

稲武

足助の町を過ぎ、信州へと向かう街道は難所が続く。中馬や善光寺参り、伊勢詣での旅人らが利用した伊勢神峠を越えると六部峠や水別峠が続き、やがて武節の町中へ入る。武節宿は、東西を貫く飯田街道(伊那街道)、南へ向かう名倉通(新城へ至る道で秋葉神社への参拝道でもあった)、北に伸びる美濃街道の分岐点にあり、物資の運搬や参拝者でにぎわった。街道は、地蔵峠や難所の杣路峠と続き、信州・根羽に至った。



①南朝方の皇子・伊良親王の史跡のひとつ。親王の伝説は奥三河から南信州に点在。②武節の町で材木商の傍ら塩問屋を営んでいた。③戦国時代から残る古道。名倉川を渡る手前に関所が設けられていた。④推定400年弱の枝重桜の名所。



豊田市

伊良親王や戦国武将の足跡を辿るコース

街道は足助から伊勢神峠を経て稲武に入る。市街地の旧道沿いでひと際目を引くのが、材木問屋の傍ら塩の中継問屋を営んでいた「大和屋」の町家。武節宿として栄えた宿場町の豪商らしい風格が漂う。また多くの武将と所縁がある武節城跡や、足助から続く伊良親王に關連するスポットの周辺には数々の伝説が残されており、歴史への好奇心をかき立てる。

地域とふれあう! 四季カレンダー

- 春** いなぶ旧暦のひな祭り (2月第1土曜日~4月3日)
福よせ雛や昔ながらの御殿雛、土雛が展示される。
- 夏** 稲武まつり (8月)
廻り太鼓や手踊りは参加型。力強く山にこだまする音と大輪の花が魅力的な打ち上げ花火。
- 秋** 大井平公園もみじ狩り (11月上旬~中旬)
稲武の名家、古橋家が造成した公園。森と渓谷の鮮やかな紅葉が楽しめる。
- 冬** 氷瀑 (1月~2月)
やぐらを組み湧水をかけて作る氷瀑。ライトアップあり。

味わいたい! 地元の名産品

- ブルーベリージャム**
名産のブルーベリーを使った商品が多彩。
- からすみ**
うるち米の粉、砂糖、塩で作る伝統菓子。

information
いなぶ観光協会 ☎0565-83-3200
所 豊田市武節町針原4-1



- ① 伊良親王腰掛け石 (徒歩4分)
- ② 大和屋 (徒歩5分)
- ③ 戦国時代から現存する道 (徒歩5分)
- ④ 瑞龍寺 (徒歩2分)
- ⑤ 寛政9年の道標 (徒歩10分)
- ⑥ 大井平公園 (徒歩20分)
- ⑦ 武節城址 (徒歩5分)
- ⑧ 道の駅 どんぐりの里いなぶ (徒歩1分)

所要時間 約1時間 8分
距離 約4.2km

〔豊田市〕伊勢神峠 江戸、明治、昭和三代にわたる峠道の変遷

足助と稲武を結ぶ伊勢神峠。元は「石神峠」「石亀峠」だったが、伊勢神宮の揺拝所が設けられ「伊勢峠」に改められた。現在の主要道は昭和35年（1960）竣工の伊勢神トンネルだが、その真上に明治30年（1897）に造られた石造りの伊世賀美隧道、さらにその上に中馬の人馬や善光寺、伊勢参りの旅人が歩いた峠道も残され、「街道の変遷を知る交通博物館」とも称される。

*2012年から伊勢神トンネル改良事業（新トンネル）の調査が開始されている。



①「中馬の難所 伊勢神峠」の案内板。②伊勢神宮を遥かに望む場所に立つ。③八百比丘尼（はつひやくに）にまつわる伝説は全国に残る。

所要時間 約1時間20分
距離 約3.5km

- ① 案内板 徒歩20分
- ② 伊勢神宮揺拝所 徒歩5分
- ③ 八百比丘尼の杉 徒歩35分



↑長さ308m、高さ3.3m、幅3.15m。このトンネルの竣工によって運送馬車の往来が可能になったという。

information
豊田市足助観光協会
0565-62-1272
豊田市足助町宮平34-1
◎「伊勢神峠」にはトイレがありません。また季節によっては害獣、害虫対策を考慮してください。



〔豊田市〕夏焼 今も昔も道行く人々を見守るお地藏さん

稲武の中心地を抜けて瑞龍寺を通り、夏焼城ヶ山へ。5つの登山口の内、夏焼の登山口からほぼ国道153号線に沿って麓をなぞるように野入へとつながる山道が旧街道にあたる。「登り下り一里余」の峠は地藏峠の名前の通り、今も地藏たちが並ぶ。城ヶ山の山頂からは稲武の町並みはもとより、天候に恵まれれば恵那山、白山、御嶽山などのパノラマが迎えてくれるので、途中、街道を逸れて登山道から山頂を目指すのも良いだろう。



所要時間 約48分
距離 約2.2km~2.5km

- ① イノシシ除けの柵 徒歩5分
- ② 道案内板 徒歩20分
- ③ 地藏峠 地藏馬頭観音 徒歩1分
- ④ 地藏峠登り降り口 徒歩2分



information
いなふ観光協会
0565-83-3200
豊田市武節町針原4-1
◎「夏焼城ヶ山：飯田街道ルート」にはトイレがありません。また季節によっては害獣、害虫対策を考慮してください。

尾張・三河の塩の道

日本ではかつて、塩を海水から作っていた。それゆえ、塩は山の民にとって貴重なものであり、海岸部と山間部は塩の道で結ばれていた。愛知県でも古くから三河湾や知多半島の沿岸部で塩が作られ、伊那谷、木曾谷を通り、信州の塩尻まで運ばれていた。川船で川を上り、馬の背で奥地へと。人々の暮らしを支える塩の道は、さまざまな文化を伝える道でもあった。

◆近世の尾張と三河の塩生産

江戸初期には尾張の星崎（名古屋市南区）、常滑（常滑市）、乙川・成岩（半田市）、三河の大浜・棚尾（碧南市）、吉良（西尾市）を中心とした幡豆郡から宝飯郡沿岸部（蒲郡市）で、塩が盛んに作られていた。しかし、江戸中期以降、瀬戸内の塩が全国に広がる、尾張の塩田は次第に縮小した。一方、品質の高さで饗庭塩として知られた吉良や、平坂街道に面した宝飯郡の塩田は生産を拡大。三河湾沿岸の製塩は、江戸後期から明治初期に最盛期を迎えた。

◆海から山へと、幾本もの塩の道

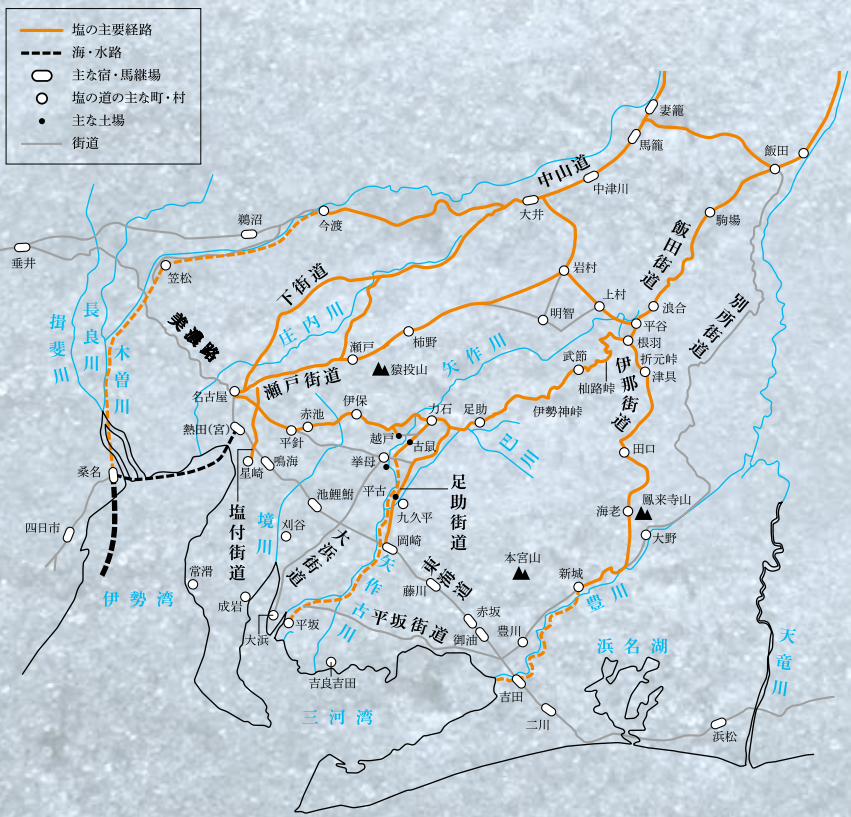
三河湾岸の塩や瀬戸内塩は廻船で矢作川河口の平坂湊に回漕され、川船に積換えられて第二の中継地、岡崎へ送られた。岡崎には塩の仕入れや、販売を独占した塩座があり、矢作川を上るすべての塩が納められていた。

塩は、岡崎から第三の中継点、足助に運ばれた。岡崎からは足助街道で運ぶルートほかに、矢作川水運で移送するルートも利用された。矢作川やその支流には荷

揚げを行う土場が複数造られ、矢作川上流部の古鼠、越戸土場（豊田市）、巴川の平古土場（豊田市）はにぎわった。塩は、土場で陸揚げされ足助に向かった。足助には、飯田街道で運ばれた塩も集まり、塩問屋で七貫目（約26kg）に統一され、新しい俵に詰め直し奥地へ運ばれた。これを足助塩と呼んだ。

足助塩は、飯田街道の伊勢神峠や柞路峠を越えて信州の根羽へ。根羽には吉田湊（豊橋市）で川船に積換えられた塩も豊川を上り、新城から伊那街道を北上、折元峠を越えて運ばれていた。さらに塩は、根羽から街道を北上し、飯田、伊那谷に向かい、塩の道の終着点、塩尻へ達した。

尾張から信州木曾谷へ向かう塩の道もあった。桑名から木曾川を上り、今渡で荷揚げし、中山道を大井、中津川、さらに木曾谷方面へ至った。運搬には尾張藩の鑑札を持つ尾州岡船と呼ばれた牛方が大きな力を持っていた。しかし、江戸幕府の五街道だった中山道は規制が厳しく、物資の運搬は敬遠された。尾張からは、下街道のルートや、瀬戸街道（品野街道）のルートが多く利用されていた。

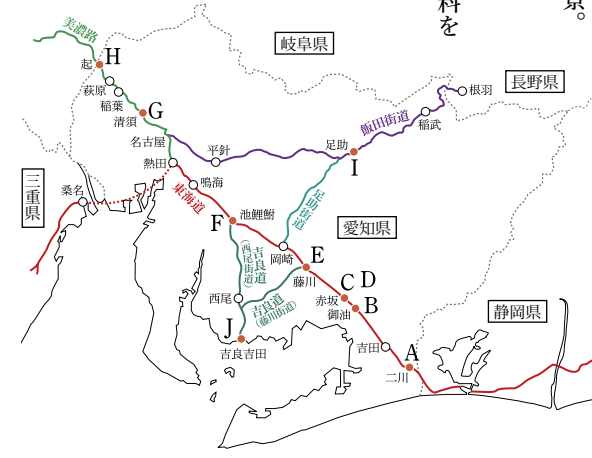


*地図は、豊田市郷土資料館「塩の歴史と民俗」展図録を参考に作成
*街道の名称や経路は、時代によって変化しましたが、上記地図のルートは、江戸と明治の二つの時代を含めた「塩の道」の概略図で、歴史学術的には正しくはありません。また文中、地図内の「飯田街道」は、江戸時代には「伊那街道」と呼ばれていましたが、吉田～新城を北上した伊那街道と区別するため、あえて「飯田街道」としてあります。飯田街道としたため、江戸期、七里街道と呼ばれた道は、足助街道としてあります。

愛知の 街道資料館を 訪ねる

参勤交代の大名たちが宿泊した本陣のしつらえや、馬の背に荷物を積んで街道を行き来した中馬たちの道具類。そして広重の描いた旅人たちと街道の風景。愛知にはかつての宿場町の様子や旅人たちの息づかいを今に伝える歴史資料を展示する資料館が各地に点在する。歴史を知れば街道旅も一味違う。江戸の旅模様を思いをさせて、

「街道資料館」に出かけよう。



- 営業時間
- 入場料金
- 休館日案内
- 住所
- 駐車場の有無(台数)
- 問い合わせ先施設
- 電話番号

E 門構え、高札、民具など貴重な資料が充実 藤川宿資料館



脇本陣跡に建てられた歴史資料館。門構えは江戸時代のもの。藤川宿の街並みを500分の1に縮めたジオラマや、岡崎市指定文化財の高札、日本陣文書、古民具などの多彩な宿場資料が約60点ほど展示されている。

営業 9:00~17:00 無料 休 月曜日、年末年始(12/29~1/3)
住 〒444-3523 岡崎市藤川町字中町北6-1
P 資料館東側、道の駅藤川宿(195台)
問 岡崎市教育委員会社会教育課 ☎0564-23-6177

D 江戸時代の赤坂宿の資料を展示 赤坂宿場資料室(豊川市音羽生涯学習会館内)



赤坂宿の歴史、赤坂宿を題材とした浮世絵、高札や駕籠などの資料のほか、豊川市音羽地区の歴史や文化、宮地山など自然を紹介(※見学をご希望の方は、生涯学習会館1階事務所にお申し出ください)

営業 9:00~17:00(見学希望の方は1階事務室にて申込)
無料 休 月曜日、年末年始
住 〒441-0202 豊川市赤坂町西裏47-1 P 無料
問 豊川市音羽生涯学習会館 ☎0533-80-1357

G 市場の様子や問屋の暮らしを今に伝える 西枇杷島問屋記念館



明治初期に建てられた旧山田九左衛門家の住居を移築復元。住居と商用部分を持った典型的な問屋構造になっている。江戸から明治時代にかけての下小田井の市の様子や野菜問屋にまつわる資料、当時の暮らしを伝える展示が並ぶ。

営業 10:00~16:00(入館は15:30まで) 無料
休 月曜日、祝日の翌平日(月曜日、祝日の翌平日が休日の場合は近日の開館日)、年末年始(12/29~1/3)
住 〒452-0045 清須市西枇杷島町西六軒20 P なし 問 清須市教育委員会生涯学習課 ☎052-400-2911(代表)

F 実物大の旅籠屋で江戸へタイムトラベル 知立市歴史民俗資料館



東海道の歴史を学ぶ資料も充実。常設展の「池鯉鮒宿コーナー」では絵図やジオラマ、浮世絵、旅道具などを展示。中でも入口から帳場までリアルに復元された旅籠屋(駒屋)は必見。江戸時代の旅人気分を味わえる。

営業 9:00~17:00 無料
休 月曜日(祝日の場合は開館)、第4金曜日(その日が祝日の場合は、その前日)、年末年始(12/29~1/3)、特別整理期間 住 〒472-0053 知立市南新地2-3-3
P 無料駐車場あり 問 知立市歴史民俗資料館 ☎0566-83-1133

I 切妻平入の貴重な銀行建築 足助中馬館



大正元年(1912)に建てられた旧稲橋銀行足助支店社屋を利用した資料館。商業、金融、飯田街道の交通、足助の町並み、馬具や塩を量った升や秤など塩の道らしい資料も展示。愛知県有形文化財指定の建物も見どころ。

営業 9:00~17:00 無料
休 木曜日(11月および祝日は開館)、年末年始(12/28~1/4)
住 〒444-2424 豊田市足助町田町11 P なし
問 足助中馬館 ☎0565-62-0878

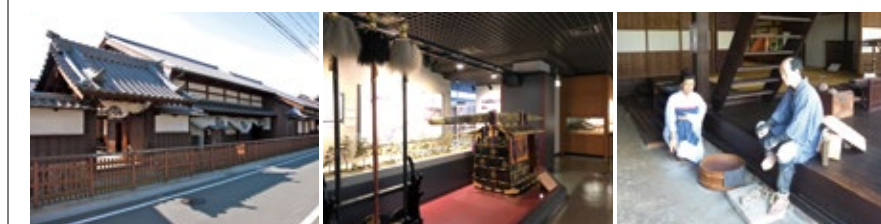
H 美濃路、起宿の歴史を模型や旧建築で体感 一宮市尾西歴史民俗資料館



常設展示室では美濃路起宿の歩みと近代以降の街の移り変わりを展示。隣接する旧林家住宅は脇本陣林家の邸宅。1階と庭園を公開している。資料館が作成した「歴史街道美濃路を歩く」は美濃路の情報をまとめた街道散策の必需品(資料館にて200円で販売)。

営業 9:00~17:00(入館は16:30まで) 無料
休 月曜日(祝日の場合は翌日)、祝日の翌日(土日祝の場合は開館)、年末年始
住 〒494-0006 一宮市起字下町211 P 無料駐車場あり 問 一宮市尾西歴史民俗資料館 ☎0586-62-9711

A 東海道上唯一の大名と庶民の宿を見学 豊橋市二川宿本陣資料館



東海道上で2か所のみ現存する本陣の遺構と、旅籠屋「清明屋」が一般公開されている。本陣と旅籠が同時に見学できる施設は全国でここだけ。身分の違いによる宿泊設備の相違などが比較できる。また併設された資料館では二川宿、本陣、東海道というテーマで江戸の旅や二川宿をわかりやすく紹介している。企画展も実施されている。

営業 9:00~17:00(入館は16:30まで) 入場料金 一般400円 小・中・高校生100円 休 月曜日(ただし、この日が祝日または振替休日の場合はその翌日)、年末年始(12/29~1/1)
住 〒441-3155 豊橋市二川町字中町65 P 無料(100台) 問 豊橋市二川宿本陣資料館 ☎0532-41-8580

J 岡崎、足助、信州に向かった饗庭塩の歴史 西尾市塩田体験館 吉良饗庭塩の里(西尾市吉良民俗資料館)



岡崎、足助を経て遠く信州伊那谷まで中馬の背に載せて運ばれた饗庭塩は、苦汁が少なく良質な塩だった。饗庭塩の里は昔ながらの塩田にて塩づくりを体験できる珍しい施設。併設された歴史民俗資料館でも入浜式塩田や吉良上野介義央公の系譜など関係資料も展示。

営業 9:00~17:00(塩田体験の受付は16:30まで) 塩田体験/一般500円(高校生以上)、小中300円 歴史民俗資料館は無料 休 月曜日(祝日の場合は開館)、年末年始(12/29~1/3)
住 〒444-0514 西尾市吉良町白浜新田宮前59-1 P 無料駐車場あり
問 吉良饗庭塩の里 ☎0563-32-3373

C 江戸時代の貴重な旅籠建物を間近で見学 豊川市大橋屋(旧旅籠鯉屋)



江戸時代の建物のまま、平成27年(2015)まで営業を続けていた旅籠建物。従来は、宿泊客以外は外観の見学しかできなかったが、保存工事を経て内部も一般公開。格子越しに東海道を見下ろせる座敷や日本古来の建築様式に触れられる。

営業 10:00~16:00 無料
休 月曜日(祝日の場合は開館)、年末年始(12/29~1/3)
住 〒441-0202 豊川市赤坂町紅里127-1 P 無料駐車場あり
問 豊川市大橋屋(旧旅籠鯉屋) ☎0533-56-2677

B 御油宿、松並木の歴史と広重の版画 御油の松並木資料館



江戸時代の御油宿の街並みの復元模型や、浮世絵版画、旅装束など資料130点を展示。版画は、広重以外にも御油宿を描いたものを多く集めて展示しており、見比べることができておもしろい。入り口には松の切株もある。

営業 10:00~16:00(12:30~13:30は休館) 無料
休 月曜日(祝日の場合は開館 ※翌日も開館)、年末年始(12/29~1/3)
住 〒441-0299 豊川市御油町美世賜183 P 無料駐車場あり
問 御油の松並木資料館 ☎0533-88-5120



時を旅する 愛知の街道

2021年2月発行

発行：愛知県観光コンベンション局観光振興課
 企画・編集：大広名古屋支社、大広WEDO
 デザイン：デイ・エム・シー
 イラスト：鈴木 ゆうゆ

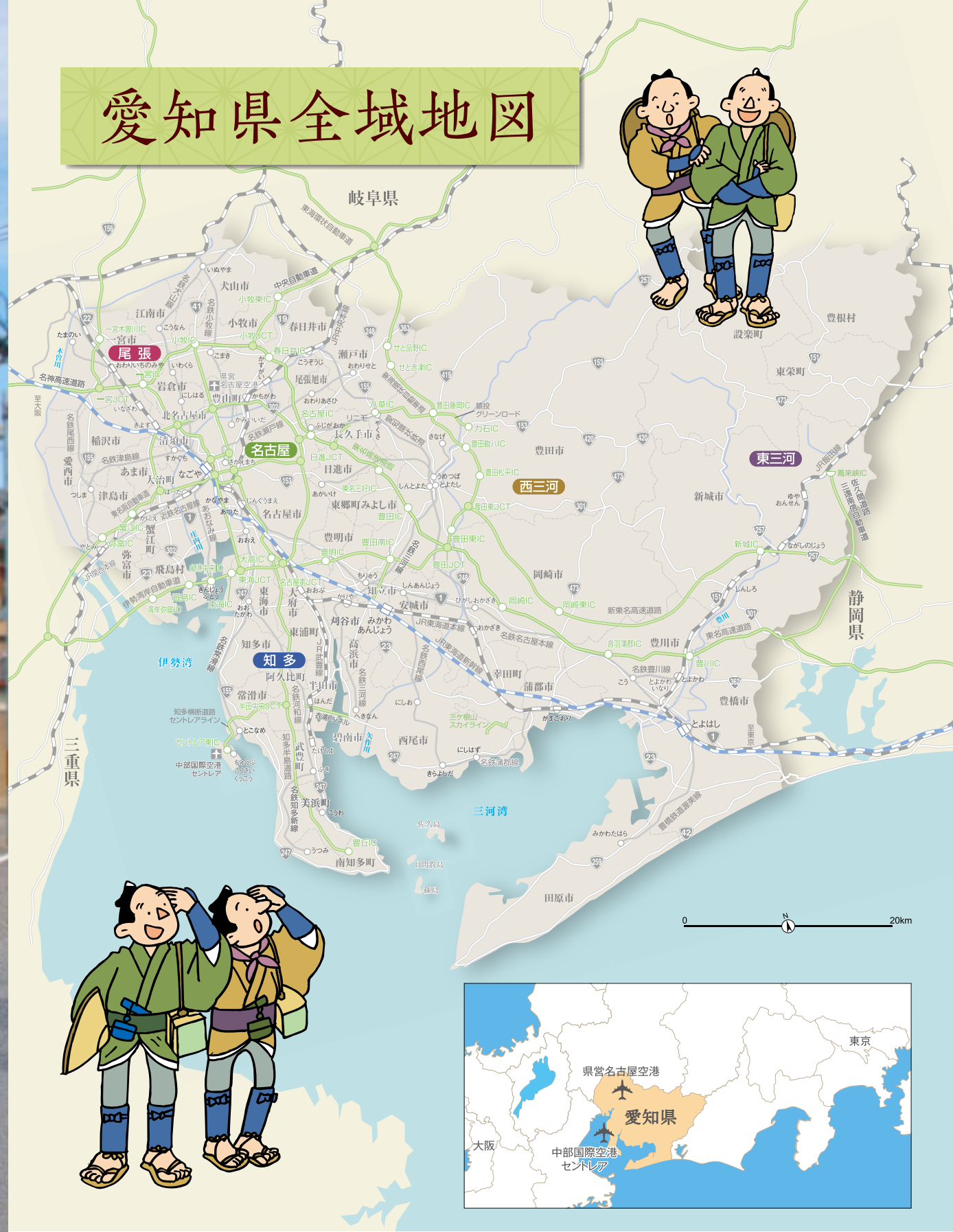
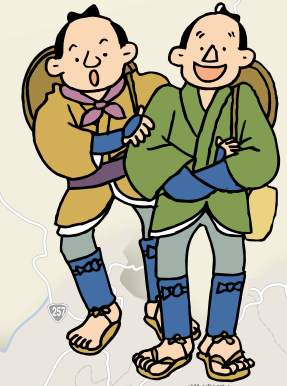
主要参考文献

- 『愛知県歴史の道調査報告書』 愛知県教育委員会
- 『愛知の歴史街道』 中根洋治 愛知古道研究会
- 『東海道・中山道 旅と暮らし』 新田時也・志田威・中澤麻衣 静岡新聞社
- 『図説 三河の街道と宿場』 大林淳男・日下英之監修 郷土出版社
- 『日本交通史』 児玉幸多編 吉川弘文館
- 『尾張の街道と村』 櫻井芳昭 自費出版
- 『美濃路』 日下英之 愛知県郷土史刊行会
- 『なごやの古道・街道を歩く』 池田誠一 風媒社
- 『なごやの鎌倉街道をさがす』 池田誠一 風媒社
- 『東海の街道1 街道今昔 美濃路をゆく』 日下英之監修 風媒社
- 『街道を歩く 飯田街道・伊那街道・姫街道』 前田典子 春夏秋冬叢書
- 『寄道草 東海道』 宮本真理子 春夏秋冬叢書
- 『中世の東海道をゆく』 榎原雅治 中公新書
- 『歩いて旅する東海道』 ウエスト・パブリッシング 山と溪谷社
- 『ちやんと歩ける東海道 西 袋井宿～京三條大橋』 五街道ウォーク・八木牧夫 山と溪谷社
- 『シリーズ・城郭研究の新展開③ 三河岡崎城 家康が誕生した東海の名城』 愛知中世城郭研究会編 戎光祥出版
- 『日本歴史地名体系23 愛知県の地名』 平凡社
- 『豊田市郷土資料館特別展「塩の歴史と民俗 三河の塩生産と交易」図録』 豊田市郷土資料館
- 『美濃路 散策ルートマップ』 一宮市尾西歴史民俗資料館
- 『新修名古屋歴史報告書4 「江戸期なごやアトラス」』 名古屋総務局
- 『景観まちづくりガイドブック01 藤川』、『景観まちづくりガイドブック02 本宿』
 岡崎市都市整備部まちづくりデザイン課
- 『名古屋市熱田区役所、昭和区役所、千種区役所、西区役所、緑区役所、南区役所
 各ホームページ「史跡散策路」』

*本ガイドブックのデータは、2020年12月時点のものです。

清須宿本陣跡(清須市)

愛知県全域地図



- 使用画像について
- 表紙画像(上から下に順に): 有松の町並み(名古屋市)、伊勢神峠(豊田市)、宮の渡し公園(名古屋)、起宿本陣跡(旧林家住宅)(一宮市)、豊橋市二川宿本陣資料館(豊橋市) / 浮世絵 歌川広重「東海道五拾三次内 鳴海」「同 宮」「同 岡崎」「同 二川」画像一部(静岡市東海道広重美術館蔵)
 - 裏表紙: 御油のマツ並木(豊田市)